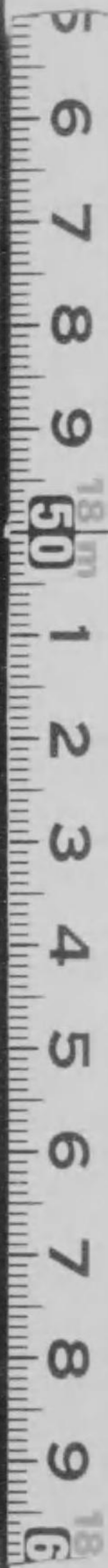


252.5
82



始



35.12.24

252-82



文學士青木誠四郎著

教育的兒童心理學

東京古今書院刊行



讀者へ著者より

一、この小冊子は、教育の實際の参考に役だつために、編まれたものでありまして、教育上の實際問題を主として取扱ひました。従つて、心理學の敘述と、教育の實際上の敘述とをからませたものではありません。

一、この書の敘述について、簡單にして要を得ないことがありましたなら、参考書についてこれを調べられるよう、また、もし著者へあて、御質問下さるならば、できるだけは御答へいたします。

序

近代的精神は、われわれに各自の個性を尊重することを教へ、この故に相互に人格を尊重すべきことを教へ來つた。個性解放の聲は、近代を貫く明き灯とも云ふべき著しい考への一と云はなくてはならない。

教育の方面に於て、近來個性の自由と個性の尊重とが高く唱へられて來たことも、一にこの近代的傾向に、その因を求めるところができると思ふ。併しながら、果してこの個性解放、個性尊重の考が、一般の教育者―教師、父兄、一般社會人―に了解され、實行されてゐるか云ふことを考へて見るに、到底満足な回答を得ることはできない。

先づ學校について見よ、教師が兒童の個性を了解して、これについて、充分

の注意を拂つてゐるであらうか。いたづらに規則づくめにして、兒童の溢れ出づる生氣をおしこめ、賢きもおろかなるも、一樣の期待をもつて、教育してゐるこゝがないか。時に試験を以つて、最上の獎勵を考へて、兒童の好學心を進めようを考へてはゐないか。

これを一般家庭にある兒童について見るに、彼等は、行儀を強ひられて活力を殺がれ、成人の興味によつて、種々な作業を強ひられる。運動に不自由な錦繡を身につけしめられ、興味を熱心によつてなした仕事は一笑に附せられ、時に一喝に會するこゝさへある。玩具を與へられても、讀物を與へられても、自己の個性や發達如何が考へられ、自己の人格的尊重を基とした取扱を受けこゝが少ない。

これ等の事實は何れの地何れのこゝろに於ても、その間に多少の差こそあれ、大同小異の様に考へられる。兒童の眞の個性尊重と眞の自由發達

こゝが基調となつて、教育の行はれてゐる場合が少ないのである。

かく自由を重んじ、兒童の人格を尊重するを云つても、たゞ漠然と云ふのみでは何人も手を拱ねてこれを念ずるの外に出でないであらう。この幼きものゝ個性を尊び自由を愛するために、まづ吾々は何をなすべきであらうか。

「知は愛を生ず」は、名匠ダヴィンチの言葉として傳へられてゐるが、眞にその本性を認識し個性を知るこゝは、その兒童に對し、その兒童の個性に對しての愛を生ぜしめ、また、これを尊重するの念を生ぜしめる。

今の世の多くの人々には、この兒童の本性に對する認識が少ないのである。何が子供であるかを云ふこゝを知るこゝが少ないのである。兒童のなすこゝを云ふこゝについての了解がない、従つて兒童の立場を云ふこゝがわからないのである。この兒童の立場を云ふものに了解のない人、測れば

兒童の本性について認識のない人は、兒童の個性の認識を缺き、従つてその本來の貌を知らないために、兒童の絶對性を認めず、その人格を尊重するに云ふことを考へるに、でき難いのである。これを一方から云へば何が兒童の人格を尊重する所以となり、何が兒童の人格的發展を傷めるか、云ふことについて、殆んど考ふるに、できないわけである。

こゝに於て余は、まづ兒童の立場にたつてその本來の貌を識り、兒童の人格を尊重するために、まづ兒童の本性を學ばなくてはならないと主張するものである。こゝにこの書は、かゝる任務を果さうとするために、貧しさを省みず生れたものである。即、できるだけの範圍に於て、兒童の本性を盡き出さうと試みたのである。

かくて、兒童の生活について見るに、彼等の生活の中最も重要な地位を占

めてゐるものは何であるか。云ふまでもなく本能である。兒童の遊びを見ても、行爲を見てもこの本能に云ふことから考へられることが多い。殊に幼少の兒童に於て然りである。兒童が生長するに従つて、この本能に、後天的のものがつけ加はつて来る。注意の發達でもはじめは、たゞ見るに云ふことは一つの本能的興味に支配されてゐるが、漸次變つて來て、有意的な注意に云ふものがあらはれて來るのである。

こゝに於て、兒童生活の教養に於ては、まづ余は、本能生活の訓練を第一として考へなくてはならないと考へるものである。習慣による本能の馴致も云ふが如きものが、幼き子供の教養には、殊に幼いほど第一となるべきものと思ふ。バイル教授が「本能の順應これ即教育である」と云ふことが、こゝに幼兒教育の眞髓の様に思はれる。

次に兒童の個性を認めるに云ふことに於て、兒童の本性——一般的の本性

―を知るこ云ふこが重大であるこは勿論であるが、その個人にまた相違のあるこ、即、兒童の個人差こ云ふこに着目するの要がある。こはじめて、個性尊重こ云ふこが、具體的に實現されるに至るのである。一般の性質こ云ふこにのみ着目した教育は、結局その個人の個性解放に何等の效果をもたらさないものである。或は一般の知能の程度に於てその兒童の特性を知り、時に特殊の材能の状態を検してその兒童の將來についての考慮をめぐらすこが、その兒童の個性を活動せしめ、やがてその兒童の幸福を將來するこは、云ふまでもないこ考へられるのである。

かく信じて、本書は本能及個人差にその一半をさいたのである。この外兒童の一般身心の發達を叙し、更に兒童の徳性涵養に資するため、美的情操の發達と道德性の發達についてのべた。

勿論かくの如き小冊子を以つて、兒童生活の全部を描き出すこはできない。たゞ私の考へに従つて、兒童の教養上について重要と思はれる點をのべたのであるこを重ねてこわつておきたい。

幸に世の教育の任にあたりつゝある人々―父母、教師、更には近く母たらんこする若き婦人にこの書の讀まれ、幼きものが眞に愛せられるやうになれば、たゞに私の幸福のみではない。

大正十一年八月

信州追分にて

著者

目次

第一章 一般身體の發達と養護……………一
一、身體の一般的發達……………二、身體と精神との關係……………三、身體の養護……………

第二章 個人差……………二七
一、個別差の現象……………二、一般知能の個人差……………三、特殊材能の個人差……………四、個人差の原因……………五、個人差と教育……………

第三章 本能……………五九
一、本能の性質……………二、本能の教育……………三、個體保存の本能……………四、適應本能……………五、社會的本能……………

第四章 習慣と教育……………一二五
一、習慣の形成とその効果……………二、習慣形成の難易と年齢……………三、習慣形成の條件……………

第五章 道德性の發達……………二二九
一、道德的陶冶の根柢……………二、一般の道德的發達……………三、道德意識の發達……………四、道德的情操の發達……………五、模倣、意志禁止……………六、習慣の形成……………七、道德上の異常兒……………

第六章 美的感情の發達……………一五
 一、美的感情の研究……………二、眼の美感の發達……………三、耳の美感の發達……………
 第七章 各種精神機能の發達……………一五
 一、注意……………二、認識作用……………三、記憶……………四、想像……………五、思考……………

— 終 —

教育的兒童心理學

青木誠四郎著

第一章 一般身體の發達と養護

本書自體の叙述に入るに先だつて、少しく身體の發達についての概觀をなし、これが境遇による相違または精神發達の關係について一言しておきたい。

一、身體の一般的發達。身體的發達の如何を視ふものとしては、まづ身長及體重によることが多い。殊に身長は、身體發達の指數として用ひられ

ることがしばしばある。(例へばラスク(Rusk)の如き)
 本邦の兒童について、其の身體的發達の狀況を明かにしたものは、醫學博士三島通良氏の日本健體兒童發育論を以つて最初とする。これは、初生兒から青年期までの多數の兒童青年について、博士自ら測定せられたものであつて、本邦兒童の發育を知る上に於て最も貴い記録である。今これを左に掲げよう。

年 齡	男			女		
	身長	體重	胸圍	身長	體重	胸圍
初 生 兒	四九、一 <small>仙米</small>	三、〇 <small>磅</small>	三二、四 <small>仙米</small>	四八、七 <small>仙米</small>	二、九 <small>磅</small>	三二、三 <small>仙米</small>
一 年	七三、五	九、〇	四五、七	七二、九	八、五	四四、四
二 年	七九、五	一〇、八	四六、八	七八、九	九、九	四六、二
三 年	八五、四	一二、四	四八、一	八四、九	一一、五	四七、二
四 年	九一、七	一三、七	四九、五	九一、〇	一二、九	四八、六

五 歲	九七、四	一五、二	五〇、五	九六、五	一四、五	四九、八
六 歲	一〇二、八	一六、五	五二、七	一〇二、四	一六、〇	五一、九
七 歲	一〇八、三	一七、八	五四、一	一〇七、二	一七、二	五三、〇
八 歲	一一三、八	一九、一	五五、五	一一二、〇	一八、七	五四、〇
九 歲	一一八、三	二一、〇	五七、二	一一六、二	二〇、五	五六、一
十 歲	一二二、八	二二、〇	五九、二	一二〇、四	二二、三	五八、〇
十 一 歲	一二七、〇	二五、〇	六一、四	一二五、九	二四、四	六〇、二
十 二 歲	一三〇、八	二七、二	六三、一	一三二、三	二七、八	六二、五
十 三 歲	一三五、二	二九、八	六四、九	一三九、〇	三一、四	六五、〇
十 四 歲	一四一、五	三三、六	六六、九	一四三、二	三六、五	六七、七
十 五 歲	一四六、三	三八、七	六九、〇	一四四、七	三八、二	七一、九

これによつてその大體を見れば、まづ身長に於ては、初生兒は、男女平均四九〇種であつて、生後五歳乃至六歳となるまで、その二倍となり、十五六歳となつては約三倍となるのである。また、體重に於ては、初生兒男女平均六〇〇

○瓦であつて、生後五六ヶ月でその二倍となり、十二ヶ月で三倍となり、五歳では、五倍、男十三四歳(女ではこれより一年位早く十二、三歳)なれば、十倍に達するのである。

尙この身長及體重の發達狀況は、文部省によつて發表されて居る本邦學生、生徒、兒童、發育二十ヶ年平均によつて見るの便もある。

(身長)

年齢	男女の差		一年間の増加	
	男	女	男	女
七歳	三、五三	三、四九	〇、〇四	〇、一五
八歳	三、六八	三、六四	〇、〇四	〇、一五
九歳	三、八四	三、七八	〇、〇六	〇、一四
十歳	三、九九	三、九四	〇、〇五	〇、一六
十一歳	四、一三	四、一〇	〇、〇三	〇、一六

(體重)

年齢	男女の差		一年間の増加	
	男	女	男	女
七歳	四、六六九	四、五〇四	〇、一六五	〇、四一八
八歳	五、一三三	四、九二二	〇、二一一	〇、四六四
九歳	五、六一二	五、三九一	〇、二二一	〇、四七九
十歳	六、一四〇	五、九〇七	〇、二三三	〇、五二八
十一歳	六、六六五	六、四九六	〇、一六九	〇、五二五
十二歳	七、〇二七	七、二二三	〇、一九六	〇、三六二
十三歳	八、〇一五	八、二四一	〇、二二六	〇、九八八
十四歳	九、〇二三	九、三五一	〇、三二八	一、〇〇八
十五歳	一〇、四〇九	一〇、四八九	〇、〇八〇	一、三八六

六 歲	一一、九〇八	一一、四三〇	〇、四七八	一、四九九	〇、九四一
七 歲	一二、九二八	一二、〇六四	〇、八六四	一、〇二〇	〇、六三四

この表について、男女の關係を見るに、身長に於ては、常に男子が優つてゐるが、十二三歳頃に於ては、その差が少なく、體重に於ては、女子が男子に優つてゐる。併し十五歳以後に於ては、漸くその差が著しくなつて來る。これ即ち女子に於ては十二三歳に於て、急激な發達を遂げるためであつて、しかも男子の急激な發達は十四五歳にあらはれるためである。

次に發達に於ける、身長及體重の關係を見るに、一歳から四歳までは體重の増加著しく、この場合には、身長の増加は、それ程でないが、五歳から七歳までは、身長の増加が目に見えて著しくなる。八歳以後は、第二の體重増加の時期であつて、女子の十二三歳、男子の十五六歳は、第二の身長増加の時期で

ある。

今參考のため、最近合衆國の勞働省兒童課調査の身長及體重を本邦尺に換算して見れば次の如き數を示す。これをわが國の兒童の發達に比して如何にすぐれてゐるかを見よ。

年齢	身長		男女の差	一年間の差		體重		男女の差	一年間の差	
	男	女		男	女	男	女		男	女
七	三、七九	三、七〇	〇、〇九	—	—	五、九四一	五、七四八	〇、一九三	—	—
八	三、九七	三、九五	〇、〇二	〇、一八	〇、一五	六、五二二	六、二九二	〇、二三〇	〇、五八一	〇、五四四
九	四、一三	四、一〇	〇、〇三	〇、一六	〇、一五	七、一六三	六、九〇九	〇、二五四	〇、六四一	〇、六一七
一〇	四、二九	四、二六	〇、〇三	〇、一六	〇、一六	七、九〇一	七、五五〇	〇、三五二	〇、七三八	〇、六四一
一一	四、四四	四、四三	〇、〇一	〇、一五	〇、一七	八、四九六	八、三二五	〇、一七二	〇、二九五	〇、七七五
一二	四、五七	四、六四	〇、〇七	〇、一三	〇、二二	九、三〇五	九、四七四	〇、一六九	〇、八〇九	一、一四九
十三	四、七五	四、八三	〇、〇八	〇、一八	〇、一九	一〇、二六一	一〇、七三三	〇、四七二	〇、九五六	一、二五九

十四	四、九七	四、九七	〇	〇、三三	〇、一四	一一、四八三	一一、九〇六	〇、四三三	一一、三三三	一一、七三三
十五	五、二七	五、〇七	〇、一〇	〇、二二	〇、一〇	一一、九六〇	一一、八三六	〇、二三三	一一、四七三	一一、七三三
十六	五、三九	五、一一	〇、二六	〇、二七	〇、〇四	一四、六四一	一三、五五二	一、〇八九	一、六八一	〇、七二四

身體の一般的發達について、尙こゝに述べておきたいのは、歩行期及生齒の時期についてである。これ等の時期は身體の發達の途に於ては、可成り著しい現象であつて、後述することではあるが、兒童養護の上に、注意しなくてはならないこゝの一つである。

まづ歩行期は、三島博士によれば、平均十二ヶ月であるが、余の調査したものに於ては、十五ヶ月を平均としてゐる。而して、最も早きは、十ヶ月であつて、最もおそきは、二十二ヶ月であつた。多數の兒童中には、これよりもはるかにおそいものもあらう。

次に生齒の時期は歩行の時期より早く、三島博士によれば、平均七ヶ月であつて、八ヶ月を最多とし早きは五ヶ月、最もおそきは十三ヶ月になつてゐる。

これ等身體の發達は、兒童の境遇によつて、その間に多少とも相違を來すものである。即、境遇——主として、經濟的の境遇即貧富——がよければ、身體の發育よく、境遇がわるければ、身體の發育も思はしくない。貧民の子弟に顔色のすぐれない子供を見るこゝは、珍らしいこゝではない。

ラスクは、英國のグラスゴウ(Glasgow)に於いて、兒童の身長、並びに體重、兒童の家の室數との關係を調査して見た。こゝに室數は即、貧富の度を示すものであつて、本邦に於いて疊數の少ないものが一般に貧しいと云ふこゝと同じに、室數の少ないのは、一般に、多いものより貧しいと云ふこゝを前提として、考へられたのである。その關係は次の數によつて見るこゝができ

る。

(身長)

室數

一室

男 四六、六^吋

女 四六、三^吋

二室

男 四八、一

女 四七、八

三室

男 五〇、〇

女 四九、六

四室以上

男 五一、三

女 五一、六

(體量)

室數

一室

男 五二、六^吋

女 五一、五^吋

二室

男 五六、一

女 五四、八

三室

男 六〇、六

女 五九、四

四室以上

六四、三

六五、五

一室、四室以上、即前提に従つて、貧富の兩端をこつて見るに、身長に於ては、男女共四、七吋、體重に於ては男、一七、七封度、女一四封度の相違を示してゐるのである。以つて境遇と身體と發育の關係の大體を知るに足りるであらう。

二、身體と精神との關係。單に身體の發達のみを見ることは、本書の目的とするところではないのであるから、余は次に精神と身體との關係について述べよう。精神の發達についても、全く身體をはなれて考へることはできないのである。身體と精神との間には、離れ難い關係が存してゐるからである。この事はすでに、遠い昔、ギリシア人が云つたこと傳へられてゐる。健全なる精神は健全なる身體に宿るに云ふ言葉によくあらはれてゐる。

身體の虚弱なものが精神的に不活潑であることは、常に人の見るところ

であるが、身體の發育がおくれたり疾病にかゝつたりするに精神の働きにも悪い影響を及ぼすものである。

歩行の時期の如きは、前述の如く從來身體發達の標徴とされて來たのであるが、その時期がおくれるものには、また一般に精神の發達もおくれているものが多い。これ即歩行し得るに云ふことは、即身體の調整をなして移動し得るに云ふことは、心身共に相當の發達を遂げなければできない。であるから、歩行の時期の後れるに云ふことは、身體の發育がおくれ、また同時に精神の發育も後れたものを見るに云ふことができる。このことについて余は、小學校兒童の發育を調査し、その歩行の時期と學校入學後の成績との關係を考察して見たところ、次の如き著しい關係のあることを明かにすることができた。

學業成績總點	歩行時期範圍	平均
三五—四〇	一五—二六	一七、〇
四一—四五	二一—二四	一七、九
四六—五〇	二二—二四	一八、八
五一—五五	一〇—二二	一四、五
五六—六〇	一四—一八	一四、六
六一—六五	一一—一五	一三、三

テルマン(Terman)との關係について、次の如く著しい關係のあることを發表してゐる。

範 圍	平 均
正常兒	一四、〇
低能兒	一二、四

優秀兒

九—一八

一三、四

即知能の發達のおくれてゐる兒童に於ては、身體發育の標徴を云はれてゐる歩行の時期も、遅いのはこれを一般原則として認めることができるのである。

更に、また、一般に疾病にかゝるこゝ頻回なる身體の虛弱な兒童にあつては、これまた精神の發達が充分なるこゝはできない、従つてそのあらはれたる學業成績も思はしくないのである。

これについては余の調査したところによれば、左表の如く著しい關係を示してゐる。

學業成績	罹病回数	
	實數	%
○	0	0
○	1	1
二、四、六	2	2
二、三、二、二	3	3
一、一〇〇	4	4
一、二一〇	5	5
二、一〇〇		

この表は、各罹病回数を有するものゝ中の、劣等生の數を調べたものであつて、一回も罹病しないものゝ中には、劣等生は一人もないのに、五回罹病したものは、二人共劣等生であるのである。

たゞに、かくの如き關係のみならず、身體的の疾病で人間の知力を低下するを考へられてゐるものも少なくない。

まづ、難聴や、視力障害は、知識の門戸に障害を與へるために、知力の低下を來すを云はれてゐる。即、學校の劣等生の中、難聴や、近視等のものを相當多數見出すこゝのあるのは、多くの調査によつて明かである。

腺様増殖、又は扁桃腺肥大を云はれる病氣も、知的發達を妨げるものであるを云はれてゐる。マクファイル(Mac Phail)はこのこゝについての研究を發表してゐる。氏は、扁桃腺或は、腺様増殖のはげしい兒童に手術を施して、これを百名の普通兒と比較して、その進歩の狀況を見た。その結果、次の如

き状況にあるのを見たのである。

兒 童	進 歩 の 状 況		
	十ヶ月後	二十七ヶ月後	三十ヶ月後
手術を受けた兒童三十一人	三三・二%	六六・六	一〇〇・〇%
普通の兒童百人	四二・〇	四一・〇	一〇〇・〇%
手術を受けた兒童十八人	三三・二	六三・五	一〇〇・〇%
普通の兒童百人	四二・〇	四一・〇	一〇〇・〇%
手術を受けた兒童十一人	三六・三	六三・五	一〇〇・〇%
普通の兒童百人	四二・〇	四一・〇	一〇〇・〇%

即、はじめ十ヶ月はその進歩があまり著しくはないが、三十ヶ月後になる
 と、その差が著しく、目につく様になるのである。即疾病にかゝつてゐるた
 のは、知的進歩が停滯してゐるために、これを手術した後に著しい進歩を見

るに至つたのである。

寄生蟲、たゞへば、十二指腸蟲、蛔蟲の如きも、學業成績を低下するを考へら
 れ、又榮養不良の如きも、學業成績を低下するを考へられてゐる。ブランド
 ン(Banton)は、大戦によつて起つた獨逸の榮養不良兒童について、このことを
 研究し、その事實なるをたしかめた。

たゞに、身體の發育がおくれ、又は障害が起る場合に精神もその發達に障
 害を來すばかりでなく、精神的の作業もまた身體に關係するところの多い
 ものである。

精神的作業が、疲勞を生ずることは、云ふまでもないが、この疲勞はまた同
 時に、身體的に疲勞毒素を生ぜしめ、これが過度になるに、身體に障害を起す
 に至るものである。即、過度の精神作業は、身體に悪影響を及ぼすのである。
 就中、その精神作業が精神の發達に相應しないときに、その影響は、一層著し

いものであること云はれてゐる、今一例をこつてこれを説明しよう。

故障	全生徒に對する故障者の割合
體重減少	一八・〇%
皮膚白向	一二・九
食欲減退	一七・四
近視眼	一七・四
不眠症	四・五
頭痛	二九・一
憂鬱	七・三
衄血	五・一
癩癧	一二・九

てはならないことは、他の學校の入學に落第したものがその影響の殊に著しいこと云ふことである。即精神の發達に相應しない勉學がこゝに至らし

近時、中等諸學校の入學試験が甚だしく激烈になるにつれて、尋常五六年生の勉學は著しいものであることは、既に周知の事實である。而してかくの如き著しい勉學のあまりは、茲に身心の機能を害するに至ることは、想像に餘りあることである。最近、余の調査したところによれば、この影響は、普通の學校にあつても、その約半数に及ぶ程重大である。殊に、こゝに注意しなく

めたのである。今一女學校に於て調査したところについて見るに、その故障の状態は右表の如くである。

而して、他の學校に落第したものとの相違は次の數字によつて明かに見るこゝができる。

失敗の回数	故障數平均
失敗しないもの	〇・九七
一回失敗したもの	一・二六
二回	一・一六
三回	一・六〇
四回以上	二・〇〇

かくの如くであるから、兒童をして過度の作業に従事せしめることは、結局その身體に故障を生ぜしめるものであること考へなくてはならない。今ケイ(H.C.)がその自身の子供について、實際上考案した一日の日課表を次にかゝける。

衛生上より算出したる時間表

毎日の時間

年齢(生活年)	七	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七	一八
就眠時間	八時	八時	八時	八時	八時	九時	九時	九時	九時	一〇時	一〇時	一〇時
起床時間	七時	七時	七時	七時	七時	七時	七時	七時	七時	七時	七時	七時
若衣洗面等に要する時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間	一時間
食事と食後の休憩に要する時間	三時間	三時間	三時間	三時間	三時間	三時間	三時間	三時間	三時間	三時間	三時間	三時間
遊戯及隨意作業に要する時間	六時間	五時間	五時間	五時間	五時間	五時間	五時間	五時間	五時間	五時間	五時間	五時間
學校家庭の強要作業時間	二時間	三時間	四時間	四時間	六時間	六時間	七時間	七時間	八時間	八時間	九時間	九時間
學校の著席時間(休憩時間を含む)	二時間	二時間	二時間	二時間	四時間	四時間	四時間	四時間	五時間	五時間	五時間	五時間

これによつて見れば、大體兒童の勉學時間は、最高三時間を越えることは「過度」を見なくてはならない。入學試験の場合の如きは、平均五時間六時間を勉學するのであるから、そこに身體の障害を惹起することは、實に當然と

云はなくてはならない。

三、身體の養護。 以上身體の一般的發育及身體と精神との關係について、大體を述べたのであるが、さてこれを教育上いかに養護すべきか云ふことを考ふるに、身體の積極的養護、即健康の増進のために、體育を奨勵し、またよく衛生的なる生活習慣の養成につとめなくてはならないことは勿論であるが、この場合よく運動の生理的衛生的考慮をなし、習慣の養成にあつては、衛生の何たるかを解して、後章に述ぶるところの習慣養成の心理を考ふべきである。併しこれ等のことは直接精神上の問題と關係がないから、今は、ただこれだけの注意に止めておきたい。こゝにおいては主として身體と精神との關係上からの考慮を進める。

まづ第一に考ふべきは、兒童の身體的障害が精神に及ぼす影響である。兒童がこれ等知的障害を來す様な疾病異常にかゝつてゐるや否や云ふ

こゝは、他の疾病と共に、詳かに注意しておく必要がある。よく近視の兒童について、両親や教師が何等知ることなしに於て、身體検査の時はじめて發見しておさろく云ふ様なこゝがあるが、かくの如きこゝのないやうにするこゝが肝要である。學業に遲滯を來した時の如きは、殊に詳かにまづ身體の狀況に注意するを要する。

かくの如く、身體の發育に於て、一般に遲滯を來した場合、又は、疾病にかゝつた場合には、精神にも亦健全な發達を望むこゝはできないのであるが、更にまた、精神の發達の遲滯し、障礙を蒙つた場合に、これに過度の負擔をせしめるこゝ、こゝにまた二重の障害を身體に與ふるものである。かゝるが故に上述の如く學業と身體とを關係して考ふるに同時に、疾病の後なきにはその間に自ら勉學に手加減を要するものである。

一方、また學習の最もはじめである就學に際しては、果して兒童の身心に

故障なきや否やを充分に檢するの要がある。近時本邦に行はれ來つた就學前の身體検査は、この點から見て、最も望ましきものゝ一つである。この検査は、就學前半年位に於て執行されべきものであつて、こゝにその故障の有無を檢して、或は、入學前の治療を奨め、或は、入學の猶豫をすすめる等の事をなすのである。余は更に、こゝに、兒童の歩行期、及言語期を調査し、就學前の罹病狀況を檢するこゝを主張するものであつて、この歩行期、又は、罹病狀況は、就學期の精神發育の狀況を檢するに好都合であるこゝは既に前述したこゝろによつて明かである。

この事については、拙稿「就學兒童の身心發達に関する研究」(兒童研究所紀要第五卷にあり)を参考せらるれば、詳しいことを明かにすることができらる。

かくの如くして、はじめて、學習に堪え得る兒童を選択することができるのであつて、こゝに兒童學習の第一歩を祝福することは、身心相關の理から考慮してまづ第一に大切と云はなければならぬ。

次に身體養護上、大切なのは、疲勞の問題である。疲勞の堆積が如何に、身體に害を與へるかは、既に述べた入學試験の例によつても見るこゝができて、その日に生じた疲勞を回復するこゝなしに次の日を迎へるこゝ云ふ様では、結局身體を害するに至るこゝは疑ひもないこゝである。この疲勞回復と云ふ方面から見て最も大切——唯一の回復條件と云はれてゐる——に思はれるのは、睡眠である。

果して、兒童一日の睡眠が何程を以つて足れりやと云ふこゝは、尙研究されつゝある問題であるが、前述のケイのものによつても大體の睡眠時間は知るこゝができる。次に掲げるものは、クローリツヒ(Klorich)の標準時間である。

年 齡	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
時 間	九・二	九・二	九・二	九・二	九・二	九・二	九・二	九・二

然るに、これをわが國に於ける調査に見れば、兒童の實際の睡眠時間は、遙に少ない。今淡路園次郎氏の本邦學童について調査したものによつて見れば、

年 齡	七	八	九	十	十一	十二	十三	十四
時 間	九・三	九・〇	九・六	九・六	九・〇	八・四	八・八	八・〇
女	一〇・六	九・八	九・三	九・六	八・四	八・六	八・三	八・〇

の如くであつて、少なきも三十分、多きは一時間以上の相違があり、殊に女子に於て、この傾向は、一層著しい。こゝに於て、わが國の兒童には、尙一層多くの睡眠を與へなくてはならない。しからずんば、國民的睡眠不足を來すこゝ

云ふべきであらう。

而して、睡眠はたゞに時間的に長いと云ふのみでなく、その深さに於て深かるべきを要する。であるから、なるべく刺激のない處に眠らせて、睡眠の度を深くし、また疲労の高まらないうちに睡眠して、睡眠の効果を増すために、夜は早く眠らせる等のことは、睡眠の教育の上に大切なることと云はなければならぬ。

この外、兒童の疲労を少なくするために、通學路程を考慮し、授業時間と休憩時間との調整を保ち、授業時間割の編成を考案し、始業時間を適當にする等は、以上の諸問題と關連して、兒童身體の養護上最も大切なことと云はなくてはならぬ。

心理學上から見て、兒童の身體養護の項目は、凡そ以上の如くであるが、これ等は、尙後に述べるところによつて、一層明かにすることができらうであらう。

第二章 個人差

一、個別差の現象。すべての自然現象には、必ずこの個別差の現象が存在する。豆の大きさでも、木の茂り方、または高さでも、その間に全く同じものはなくて、必ずその間に多少の相違がある。この個々のものゝ相違を名づけてわれわれは、個別差と云つてゐる。

春のはじめに蒔かれた草花の種子でも、やがて芽を出して、成長し花をつける頃になれば、必ずその間に相違を生ずる。あるひは、花の數にも大きさにも、或は葉のつき所、葉の大きさ等、一つとして、同じものは存在しない。これ草花の間に個別差の現象が存するからである。

已に述べた様な、人の身體の發育の狀態は、その大體の傾向であつて、其間に必ず個人によつて相違のあること、即個別差の存することを忘れてはな

らない。同じ八歳でも七歳六歳位の丈の高さのものもあれば、九歳十歳位の丈の高さのものもあることは、われわれの日常経験するところである。

たゞへば、就學の兒童はその四月にあつて、前述の文部省の標準に従へば、三尺五寸位なければならぬのであるけれども、これがある學校の兒童について測定して見るに、次に見るやうな狀況になつてゐる。この標準の高

三・三	一	四	〇	男	一	二	計
三・四	一	三	五	〇	六	五	一
三・五	一	三	六	〇	四	六	〇
三・六	一	三	七	〇	八	六	一
三・七	一	三	八	〇	四	一	〇
三・八	一	三	九	〇	二	〇	二

さの近く又はその少しく上——東京の兒童は全國の平均に比して身長が高い——が多いけれども、決して一樣ではなく、個人によつて相違がある。

たゞこゝに注意すべきは、こ

の個別差の現象は、その平均、又は大體の傾向のものが最も多く、これに違はるに従つて少なくなり、極端に劣り、又は優つてゐるものは最も少ないこと云ふことである。即、尋常一年ならば一年相當の丈の高さ、即三尺五寸位は最も多く、これをはなれることが多し程その数は少くなる。一學級の中でも極端に丈の高いものは、誰某に直ちに名を呼ぶことができ、また極端に丈の低いものも同様であるのは、この關係あるによるものである。

二、一般知能の個人差。

精神の發達にもやはり、個別差——人について云ふ場合は個人差——があらはれる。精神の發育を論ずる場合に云はれることは、たゞこの大體の傾向についてのみである。その間には、身長に高低があり、體重に輕重があると同様に、こゝにも亦個人によつての相違があらはれる。而して最初この間にあらはれる差違を量的に研究したのは、實にイギリスのガルトン(Galton)その人である。

現在、吾々は、この精神の働きの個人差を考へるに、二つの方向がある。一つは、精神の總和的の發達の優劣であつて、一つは、特殊な精神の發達の個人による相違である。

精神の總和的發達についての個人差は、すでに多くの學者によつて研究せられたものであつて、一般知能の個人差を稱せられてゐるもの即これである。

知能とは如何なるものであるかについては、種々の説がある。モイマン (Meumann) は、獨立した創造的思考(即創造的、綜合的な思考作用)及全精神生活の強度を云ふことを以つて、その要素を考へた。ビネー (Binet) は、判斷、想像の性質をあけてゐる。併し乍ら、現在に於て最も用ひられてゐる考へは、知能とは新しい要求に従つて、思考を意識的に順應せしめる個人の一般材能である(云ふ、シテルン (Stein) の定義である。これを要するに、これ等の

内容を見るに何れも心理學的に云ふ聯合、注意、思考を云ふやうな、所謂統覺的方面の働きをさしてゐるものであると云ふのは、多くの學者の一致してゐる考であらう。

かくの如き知能の個人差は、普通、賢いとか、愚かだ、とか云ふ言葉によつて呼ばれてゐるが、これを量的にあらはして、人の知能の階段を定めようとする考へが行はれて來て、所謂知能検査法 (Mental Test) が生れて來た。

知能検査法は、昔から考へられなかつたことではないが、現今用ひられてゐる様な検査法は、千九百四年にフランスのビネー及シモン (Simon) によつて考案されたのを最初とする。當時、パリに於て、劣等兒即ち知能の劣つてゐるものゝ特殊教育をなすの議が起つて、時のパリ大學の心理學教授であつたビネーにこの事を依頼したのである。こゝに、ビネーは精神病學者たるシモンと共に、この検査法を考案し、千九百五年に、三十の検査法を發表し

た。ついで、千九百八年にこの検査法は、年齢によつて検査の問題を異にするやうにし、各年齢に該當する検査法に合格すれば、その年齢の知能に達してゐるものと定めた。これ即知能年齢である。たゞへば五歳の検査法に合格すれば知能年齢は五歳であること定めたのである。この検査法は、更に改訂を重ねて、千九百十一年に發表されたものが、現在云はれてゐるビネーシモン検査法と稱せられてゐるものである。

この検査法は、獨逸に入つては、モイマン法となり合衆國に渡つては、スタンフォード改訂法となり、ヤーキス、ブリツヂスの點數式検査法となつたのであるが、就中、スタンフォード改訂法は、スタンフォード大學に於て、テルマンが主としてこれにあつて、生じたものであつて、知能年齢と云ふものゝ外に、知能指數と云ふものを設定して、知能發達がその生活年齢——或は暦年齢即生れて何年何ヶ月と云ふと——に比して、その位の發達を示すかを

檢するこゝのできるやうにした。

知能指數は、知能年齢を生活年齢で除した商を、百分比に直したものである。故に知能の發達が年齢と全く一致すれば指數は百となる。たとへば、満七歳六ヶ月の兒童の知能が七歳六ヶ月なれば、指數は百であるが、五歳八ヶ月しか發達してゐないとすれば、こゝは、指數は、八十五となるのである。

ビネーシモンの検査法は、The Development of Intelligence in Children. スタンフォード改訂法は、The Measurement of Intelligence 又は The Intelligence of School Children. (スタンフォード改訂法は、上村福幸氏知能測定法中に譯されてある)又、點數式知能検査法は、The Pointscale for Measurement of Intelligence(拙著、低能兒の心理と其教育中に譯出)を参照され、ば、其詳細なることを明かにすることが出来る。

本邦に於ては、大正八年、久保良英氏によつて、ビネーの醜案によつて、年齢式知能検査法があらはれ、大正十一年に、更にその改訂案が發表せられて、本邦兒童の知能検査の上に、貢獻するところが多い。

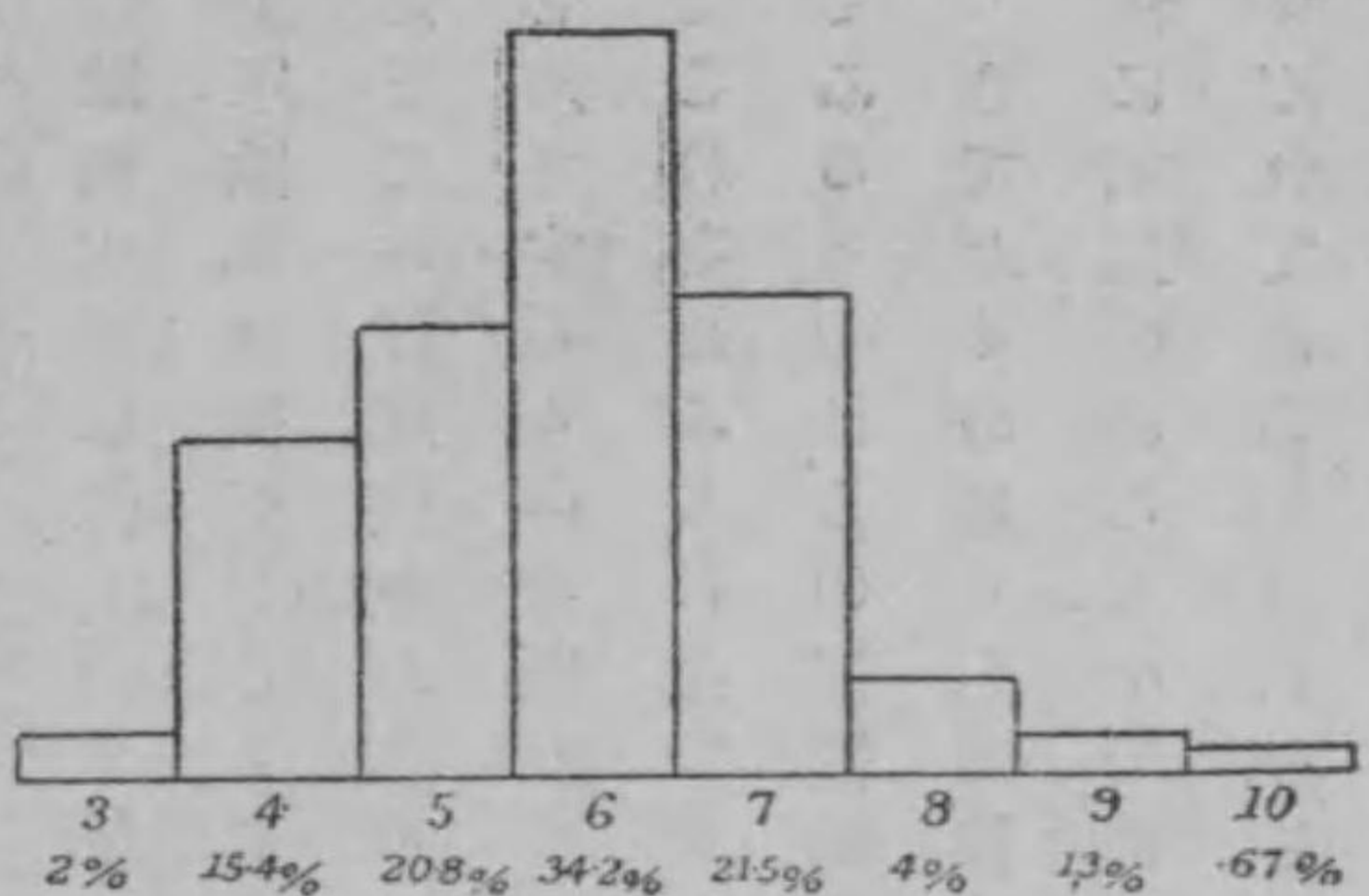
久保氏の検査法は、大正八年法は、拙著、低能兒及劣等兒の心理と其教育中に詳細なる説明あり、十一年法は、兒童研究所紀要、第五卷にあり、尙諸種のテストの改訂比較は、拙著中に詳かである。

かくの如くして、兒童の知能を個別的に検査せんとする企ては、ある程度の進歩をさけるに至つた。併し乍ら個別的に検査をするところは、多大の時間を要し、しかも知能の状態を知らんとするの要求は、多方面にわたるのでこれを簡單に行ふの方法を考へるやうになつた。即ち多人数を同時に、短時間に行つて、その知能を検出しようとする企てが行はれる様になつたので

ある。これ即團體的検査法と稱せられるものである。而してこの検査法は歐洲大戰に際し、合衆國の輸兵について、一時に多數の兵士を要した關係上、軍隊知能検査なるものを考案しこれによつてその兵科と階級とを定め、たゞころ好成绩をおさめたため、著しくその信用を増して、或は職業に従事せんとするものを選出するにあつた。あるひは、學校の入學試験にあつてこれを用ふるに至つた。本邦に所謂メンタルテスト Mentaltest と云はれてゐるものは、この團體的検査法のこゝを云ふ場合が多い。

さて、かくの如くして、検査したところによつて見るに、人間の知能には、非常に相違のあるものである。同じ年齢の中にも、二三年もしくは、五年位もすぐれてゐるような知能をそなへてゐるものもあるが、これに比して遙かに劣つてゐて、二年も三年も下のものゝ知能と同じやうなものもある。テルマンが尋常一年生についてしらべた結果を、圖にして見るに次の如くで

ある。



圖中横線の下の34は、3歳に相當する知能、4歳に相當する知能をあらはすのであつて、その當該年齢即六歳に相當してゐるものは、三十四パーセントしかなくて、これより劣つてゐるものが約三十パーセント、これより優れてゐるものが約三十パーセントあるのである。

かくの如く、人間の知能の發達は、人によつて非常な相違があるのであるが、この中、約其年齢に相當してゐる發達を遂げてゐるものを正常と云ひ、これより優れてゐるものを上智、最上智、天才なきと云ひ、また、劣つてゐるものは下智、劣等、低能と云ふ様な名でよぶ

のである。この名稱は、人によつて、多少の相違があるが、いづれも、知能指數

名稱	指數	%
天才	一四〇以上	〇・二五
優等	一一〇—一四〇	六・七五
正	九〇—一一〇	一三・〇〇
劣等	七〇—八〇	六〇・〇〇
低能	四〇—七〇	一三・〇〇
備考	二〇—四〇	〇・七五
	一〇—二〇	〇・一五
	〇—一〇	〇・〇六

Woolfowの測定による。

について云つてゐるものである。今その關係を示し、かつ、その人數の割合を示す以上の如くである。

表によつて見る如く、正常が約半數以上を占めてはゐるけれども、劣等と稱せられるものも、十八九パーセント、低能と稱せられるものも、一パーセント、——普通は二パ

ーセントと云はれてゐる——存在してゐるわけである。即精神の總和的

の働き——一般知能——は人々によつてかくの如き差違があるのである。
 三、特殊材能の個人差。たゞに人間の精神の働きには、その知能に差があるばかりでなく、一つ一つの精神の働きをこつて見ても、亦各人によつて相違をあらはすものである。

これを一般の日常經驗するところによつて見ても、ある人は繪畫を描くことに秀でゝゐるが、算術には拙い。またある人は字を書くことに妙を得てゐるが運動は思ふまゝにできない。なき云ふ様なことはめづらしくない。人はすべての材きに於て全く差等なしに優れてゐたり、劣つてゐたりするところもあるが、時には特に文學の方に秀で、時には特に數理の方に秀でゝゐるやうな場合もある。かくの如きを特殊の材能についての個人差云ふ。

この特殊の材能を検するには、各種の能力を比較的分離して検査するこ

このできる様な精神検査の方法をこつてこれを検査するべきその特にすぐれた點を見出すことができるのである。これに用ひて最も便と思はれる



のは、心性圖 (Psychograph) である。上に示すものはその一例である。

これによつて見れば、この兒童は、知能の發達は八歳であるが、特に、聯合の方面に於て發達してゐるこゝがわかる。

かくして検査して見れば、ある兒童は特に運動能力に於てすぐれてゐるかもしれない。またある兒童は特に作業の正確さ云ふことに於てすぐれてゐるかも知れない。これ即ちその兒童特殊な精神材能も稱せらるべきものである。

今その一例として紐育の教育課に於て研究した、この特殊なる材能の個人による相違を述べておかう。今同じ知能の發育を遂げた兒童十八名について見るに、表の如く、全く知能と同程度に發達してゐて、兩者共同程度

兒童數	算術	讀方	備考
九人	及	に於て智能と差なし	材能の平均にあるもの
四	に於て劣り	に於て差なし	算術の劣るもの
二	に於て差なく	に於て優る	算術に特殊の材能をもつもの
二	に於て及	に於て優る	算術讀方にすぐれてゐるもの
一	及	に於て劣る	

の能力を示してゐるものは九人だけであつて、あゝ半数は、特に秀でゐるものがあり、特に劣つてゐるものがあつて、特殊の材能の偏りを示してゐる。

またオーダール (Orlaim) の研究によるに、ある一つの検査に於てその成績によつて、六歳、八歳、十歳と三つの段階に分つておいて、他の検査に於ける結果を見るに、六歳の組即前の最劣等の組の生徒の一人は、この検査に於ては、十歳の組、即最優等の組に屬することとなり、前の検査の組、即最優等の組の中二人は六歳の組に、八歳の組のもの二人もまた、六歳の組、即最劣等の組に屬することになつてゐるのを發見したに云ふことである。これ等もまた、人間の材能に、偏りがあつて、一つの方面に優秀なれば、必ず他の方面に於ても優秀であるに云ふことは、云ひ得ないのであつて、特殊材能の存在を示すものである。

四、個人差の原因。 かくの如く、人間の一般材能即知能にも、特殊材能にも、各個人差の存することには、争はれないことであるが、然らばこの個人差は如何なる原因によつて生ずるか。

まづ、一般材能の個人差について見るに、其最も重大なるものは遺傳である。「瓜の蔓に茄子はならぬ」云ふのは古諺であるが、實にその如く、低能の子供に天才の生れることはない。さうしても、優秀なものには優秀なものが生れ、劣等なものには劣等な子供を生じる傾向が著しい。

然らば、遺傳云ふのは何であるか。遺傳とは親のもつ形質が子孫の代になつてあらはれることで前記の優秀なものゝ子に、優秀なものがあらはれる云ふことはこれ即遺傳である。

こゝで遺傳の事について詳しくはのべて居るわけには行かないが、とにかくこの遺傳といふ現象によつて、知能は親から子に傳はるものである。このことは次頁のやうな相關表について見れば、一層具體的に明かにすることが出来る。

即、親が一〇點をこつたものゝ子供について見てはあまりその關係が明

合計	子の點數							親の點數	合計
	一〇	九	八	七	六	五	四		
一					一				三
八	二	二	一	一	一				四
五五	一	八	一〇	一七	一六	二		一	五
八一	四	一一	二一	二六	八	六	五		六
一四五	一九	二九	三四	三三	二二	五	二	一	七
七九	一二	二六	一六	一八	四	二	一		八
二〇	三	一	四	五	六	一			九
三八九	四四	七七	八六	一〇〇	五八	七	八	二	一〇

(村瀬雄平氏知能の遺傳に依る)

かにならないが、親が九點をこつたものゝ子供は九點をこるものが最も多く、親が八點をこつたものゝ子供には、やはり八點をこるものが最も多い。

かくの如くであるから、親の點數によつて、その子供の點の平均をこつて見れば、上表の如くなつて、其間に多少の不規則はあらはれてゐるが大體に於て瓜の蔓に茄子のならぬこみを實際に見ることが出来る。

この八點以上が價が小となり、七點以下が價が大となることは、遺傳の退行現象(Regression)によるものである。

親	一〇	七、三
子	九	八、二
	八	七、七
	七	七、二
	六	七、一
	五	八、〇
	三	六、〇

かくの如くであるから、低能兒發生の原因の如きも、その大部分は、親の低能なるか、或はその系統のいづれにか精神病又は低能の存する場合が多い

のである、人は、低能兒發生の八〇パーセントまでは、遺傳であるに云ひ、ホリングワースの如きは、八五乃至九〇パーセントまでは遺傳であるに云つてゐる。

これ等の事實は、次にあげる例によつてもまた明かである。

父		母		年齢	職業	知能	子の數	性	職業	知能	備考
父	母	父	母								
五	一	四	五		農	農	男一人 女二人	女	農	上愚	父は大酒家 子供は何れも低能に近し
×	×	×	×					男	小學生	下愚	一家低能
下愚	下愚	上愚	上愚					女	小學生	下愚	

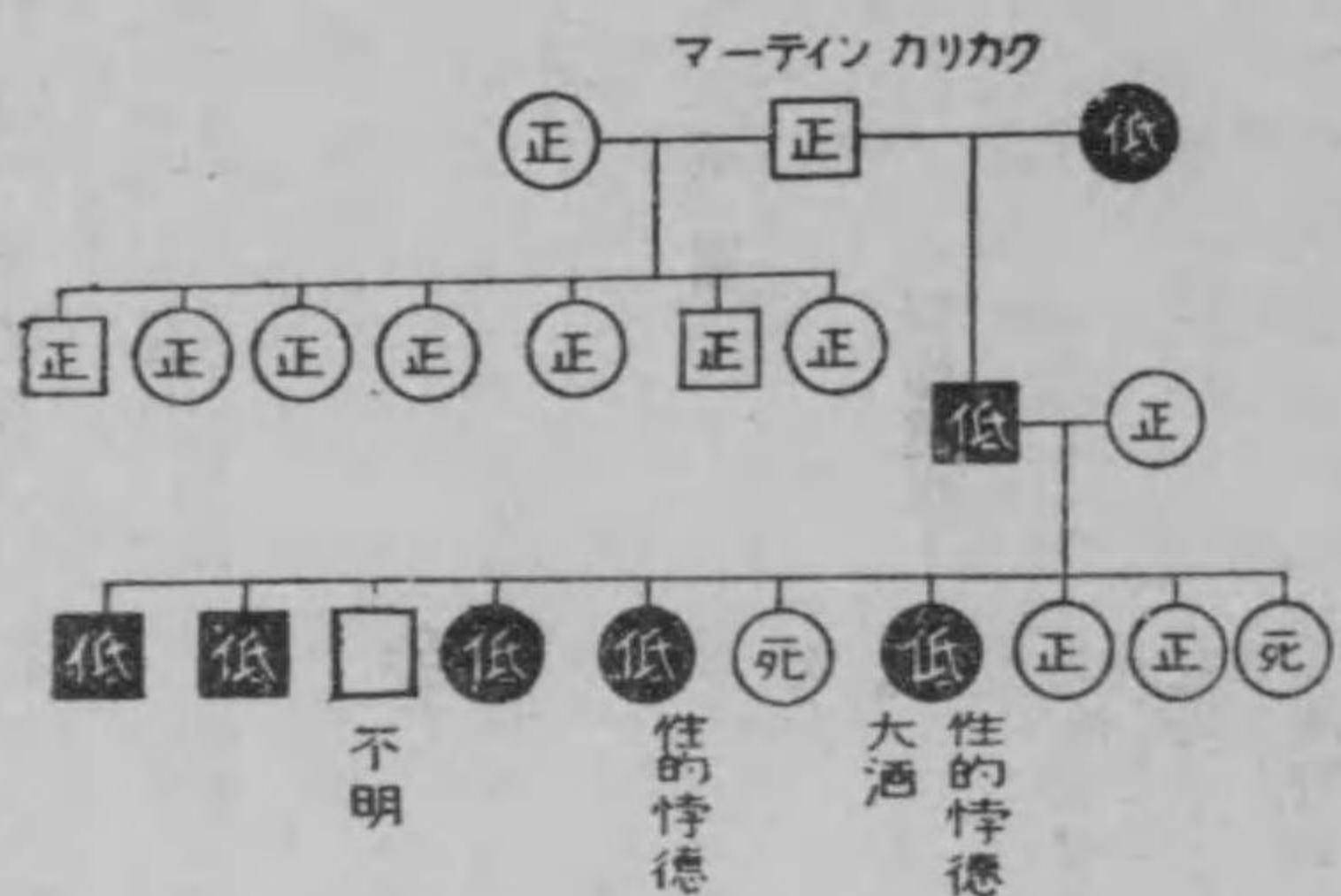
母	父
四八	四八
無	小學教員
上智	上智
女二人	男三人
男 男 男	女 女
小學 小學 師範	小學 同
生 生 生	同 同
同 同	上智
	父母共に頭腦明晰 男女共頭腦明晰

ガダード (Goddard) はこの遺傳について最も極端な例をあけてゐる。これ即ち氏の著カリカカ家族の系統研究である。今その最初の部分について、如何に著しく低能が遺傳するかを示さう。

これ等の家族の祖マーティンカリカカは獨立戰爭頃の兵士であつたが戰爭中一人の低能の女との間に一子を設けた。その系統をたゞつて見ると千九百十二年には四百八十人の子孫を見るのであるが、その中百四十三人は低能であつて、其他に多くの劣等知能のものをだし、多くの犯罪者を出

すに至つたのである。然るに、その後彼は普通の女と結婚するに至つた。

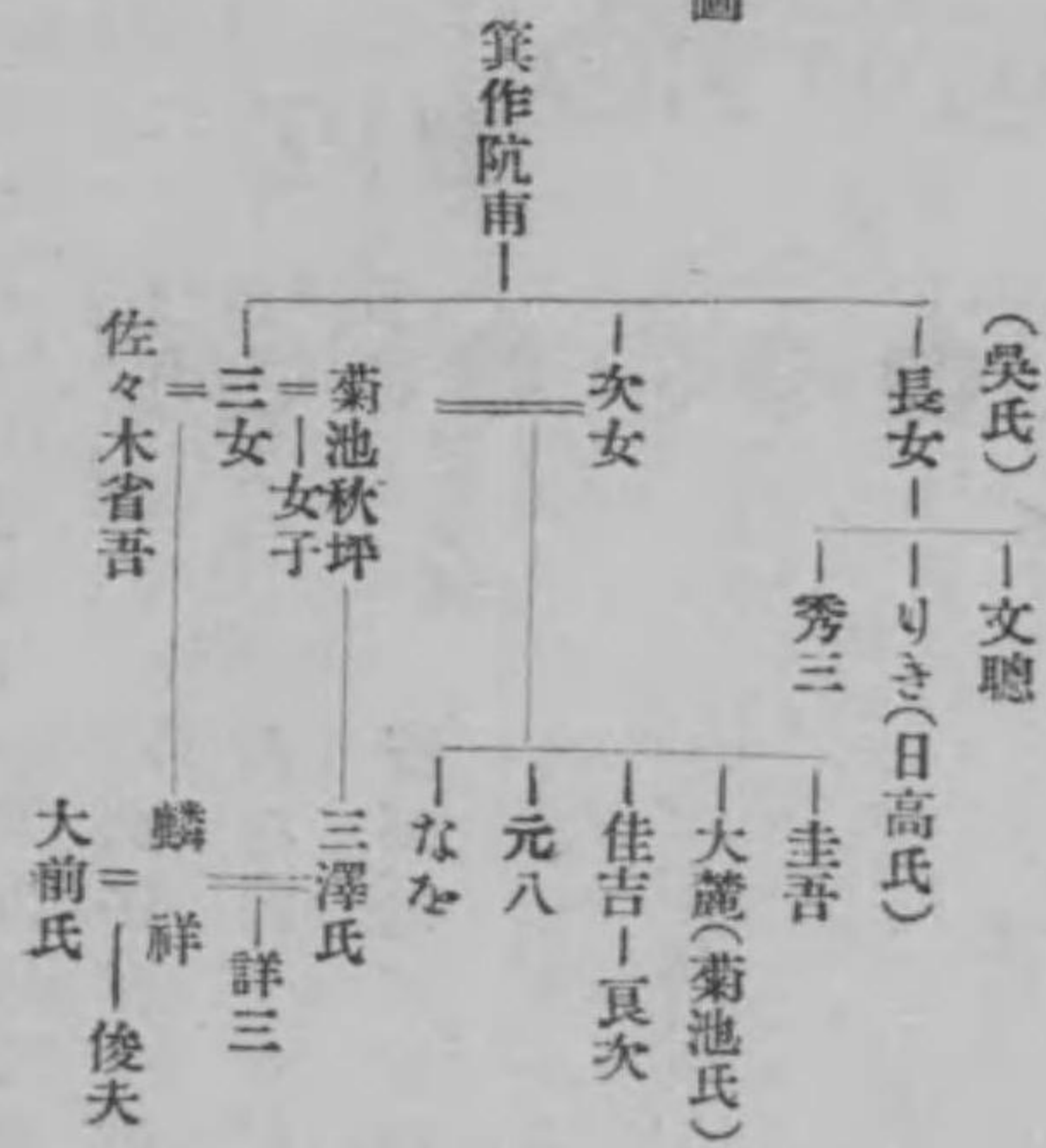
その子孫は同じ千九百十二年に、四百九十六人を數へるが、これ等の中には法律家、教育家、醫師、地主等の優秀な知能を有するものを出すに至り、一人の低能をも見出さないのである。(上圖はその最初の部分の系圖である)



これ等の研究は Goddard, Kalikak Family 又は Feeble-mindedness, its Cause and Consequence 又は知能の遺傳(村瀬雄平氏)について見れば、詳細なる關係をたどることが出来る。

これを、優秀なる知能について云つても、やはりその間に遺傳の關係が著しいのを見る。有名な箕作家の家系の如きは、その好例である。今、村瀬氏によつて見れば、

系圖



の如くであつて、これ等の事實は、またガルトンが「天才の遺傳」中にも詳かにしてゐるところである。

尙個人差中特に低能の原因としては、尙アルコール中毒によるもの、胎兒期に於て、梅毒、結核等に傳染する等のことによつて低能となることもあるのである。

さて、一般知能と同じやうに、特殊な材能もまた、殆んど遺傳によつて、決せられることが多い。この方面では特に秀でたものゝみについてわれわれは知つてゐるのであるが、それでもこゝにあけるの邊のない程、多くある。

文學者で云へば、谷崎潤一郎氏と精二氏は兄弟、岡田八千代女史と小内山薫氏も兄弟、幸田露伴氏と安藤幸子女史、幸田延子女史とは兄弟であり、長田幹彦氏と秀雄氏も亦兄弟である。かくの如きは特殊の材能の遺傳の關係を示すものを見ることができる。

以上述べたところによつて、かゝる個人差を生ずる原因は殆んど遺傳によるものであることが明かになつたと思ふ。

併し乍ら、後天的の境遇云ふ様なものが、兒童の全精神生活に變化を與へ、時に學業劣等となり、時に氣質の惡化を見ることが多いことは決して少ししないのである。貧民の子弟に、學業成績の不良なものが多いことは事實であつて、こはまた遺傳的に知能の低いのによること多いが、また一方境遇の影響を受けてゐることもあると思はれる。

即、境遇がわるければ知能が發達してゐても、境遇上經驗界が限られて、知識の發達を妨げることが少なくないのである。栄養不良が、學業成績を下する原因として考へられる如きは、その一つの好例云ふべきである。

かくて、國民の知能を優秀ならしめ、ひいて世界人類の知能を進歩せしめるためには、吾々は結婚の改良にまたなくてはならないことは、こゝに言ふ

の要もない。所謂優生學の立場は、結婚を改善して、人類の心身の質を改善せんことを企てである。身心のすぐれたものゝ結婚を獎勵し、劣れるものゝ結婚を防止して、種の改善をはかつて、こゝにはじめて、人類の知能を進歩させ、以上述べたような、低能、劣等の發生を防止し、世界を進歩させることができるのである。

五、個人差と教育。 すでに、人間の精神の發達に於ては、一般の働きに於ても、特殊の働きに於ても、優れてゐるものもあり、劣つてゐるものもあることは事實である。現在の教育に於ては、これを如何に取扱つてゐるかを少しく考へて見るに、これ等知能の優れてゐるものも、劣つたものも、何れも同一の教材について、同一の進度を定められて、同一の教室に於て教へられてゐるのである。これが果して、合理的であらうか。

こゝで、余は、この學校に於て營まれる、精神の働きならふこと云ふこと即學

習について考へて見よう。學習にいかなる精神作用が参加するかは尙研究を要するところではあるが、大體に於て、注意、聯合、記憶と云ふ様な働きが加はつて、完成されるものと見てよいと思ふ。學ぶ材料をこり入れるためには、注意が必要となり、これを自己の經驗と照合して見る上に聯合が加はり、學習の完成には、この材料が精神の中に固定するために記憶が必要となつて來る。

然るに注意は、知能に於て非常に大切な要素をなしてゐるもので、バート(Burt)なきは、注意を以つて、知能の内容とさへ考へてゐる程である。殊に注意の中でも、何心なく物に氣をさられると云ふ様な、受身の注意、受動的注意でなく、こちらから、心に向けて注意しようとするやうな、能動的注意と云ふものにこの事が著しい。であるから、低能の如きに於ては、こちらから心をこめて注意するところと云ふことができなくなるのである。

この上に、聯合に於ても、知能の劣つてゐるものは、その早さがおそく、複雑な聯合はできなくなる。かくの如くして、聯合の一種である記憶も、知能に

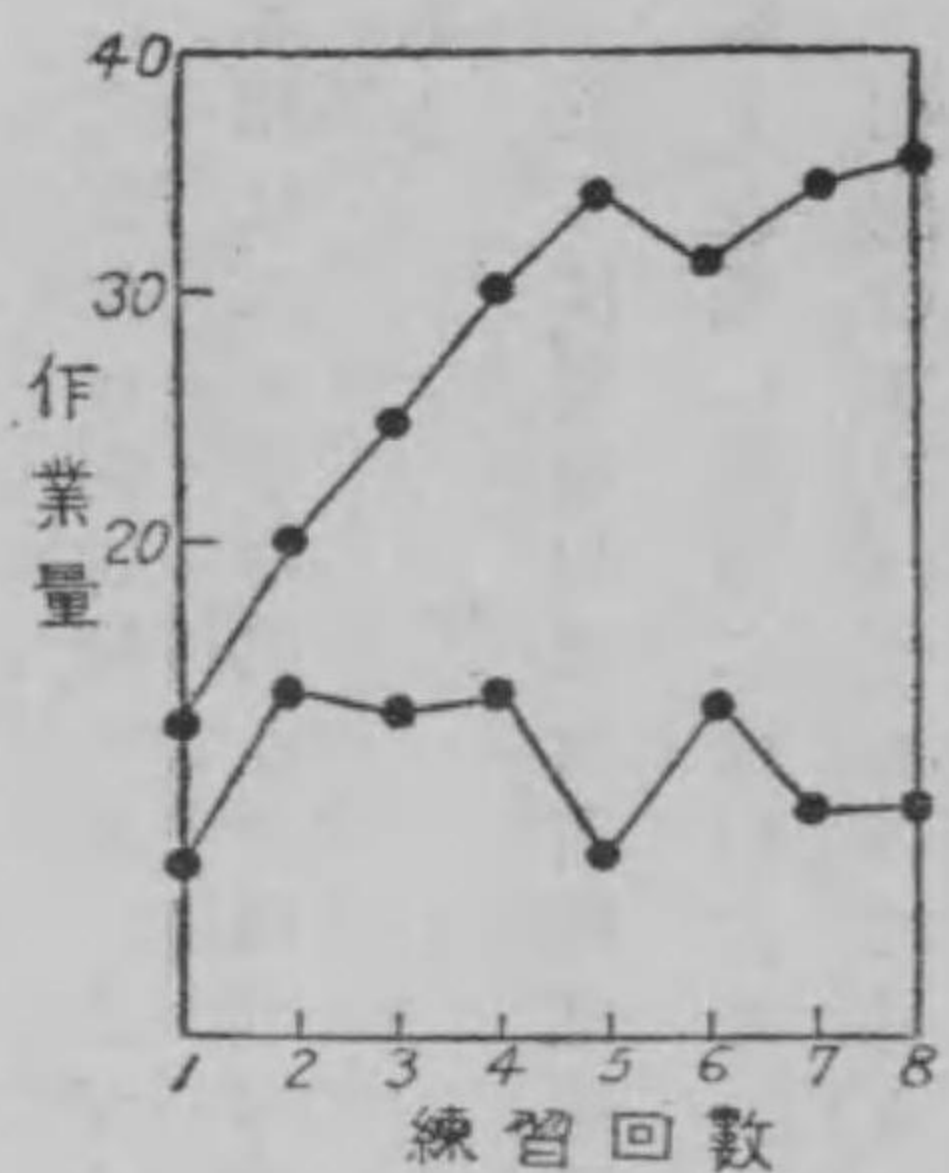
大なる關係をもつてゐる。

されば、學習に於て、知能の劣つてゐるものと優つて居るものとが同一の進歩を示すところは到底不可能と云はなくてはならない。余が、最近、學習の實驗をこの兩種の兒童に行つたところ、上の圖に示すやうな結果を示した。

(一方が直線的に上進するの一方が

少しも進歩の跡を見せないところに注意せよ)

この圖の示すところは、優等と劣等とのなす差であるが、これはまた、中等



劣等のなす差についても、同様なことを推定させる。
 かくの如くであるから、各種の知能の發達を示すものを、同一の教材によつて、同時に教授することは、甚しい不合理に云はなくてはならない。こゝに劣等生は、何等解することがなくて、學校を終らなくてはならなくなり、優等生は、たゞ手を拱ねて後れて來るものをまつに云ふ様な状態になるのである。

然らば、優等生は所謂躍進進級をさせ、劣等生は、落第させればよいか云ふに、左様に簡單にはいかないのである。

知能のすぐれたものに見るに、同じ優等生とは云つても、其材能には、様々の相違がある。この事は、檜崎淺太郎氏が、京都府に於ける優等生の調査によつて見ても明かである。

特 徴	四年生 範圍	差 異	六年生 範圍	差 異
語 構	六〇—二八、〇	三二、〇	一五、〇—三四、〇	一九、〇
反 對 聯 想	八、〇—二〇、〇	一二、〇	九、〇—二〇、〇	一一、〇
國 語	一〇—五五、〇	四五、〇	一八、〇—六〇、〇	五二、〇
算 術	六、〇—一〇〇、〇	九四、〇	二六、〇—一〇〇	七四、〇

四年生中に六年生と同一の價を有するもの、%

七〇、〇
九二、〇

即同じ優等生とは云つても、特に國語の秀でゝるものもあれば、特に算術の秀でゝるものもある。また國語の劣るものも算術の劣るものもあるのみならず、優等生は、その知能に於ては、秀でゝるても、身體的にその一年上級、二年上級と同様に發達してゐるかさうか云ふことは、疑はしいものである。

また、優秀兒童は、その氣質も異なり、神經質のものも含まれてゐる。かくの如くであるから、優秀兒は、この優秀なる兒童の一群を以つて、組織した、特

別學級に編入して教育するを理想とするのである。

優秀兒童は、尙放任するも、自らの進む力をもつこするも、劣等兒童、低能兒童に對しては、一層この特別學級を組織するの要がある。

從來、普通學級にあつて教へられてきたこは、多くは、其上に更に發達する知能を豫期して教へられてきたものが多い。かくの如くであるから、その後の知能が發達すれば、はじめて生活に役立つ様知識が完成されるけれども、それ以後の知能の發達しないものでは、全く中途の知識たるこを免れぬ。

しかも普通の兒童では、何の故障もなく完成されてゐる生活の習慣こふ様なもの、即日常の動作を敏活にする習慣、顔をよく洗ひ、着衣を正しくするやうな、清潔、端正こふ様な習慣については、何等の用意がないのである。であるから、知識は、半完成であつて、何等生活の訓練を経てゐないのであ

るから、何の役にもたさない人間となり、結局社會に害毒を流すものこなるより外なくなるのである。將來これ等劣等兒、低能兒の教育がかくの如き方針に向つて進めば、こにはじめて、これ等の兒童は救濟されるこなるのである。

一般の材能の個人差について、教育上、述べべきこは、以上の如くであるが、こに尙、特殊の材能の個人差について、如何に考慮すべきかを、一言つけ加へておきたい。

人の特徴を用ひるこは、昔からすでに云はれて來たこであつて、今事新らしく云ふまでもない。併しこの特に秀でゝゐる材能を發見するこ云ふこは却々困難であるので、實際これが考慮されて來たこは常識以上には出てゐるこが少ない。

既に述べたこによつても明かな如く、精神検査法又は學科の成績等

によつて、その兒童の特殊な材能を見出すこゝができる。

大都市にある、少年相談所の如きは、現在もこの事業即兒童の精神検査の任にあたり、その特殊材能を検してゐることは、已に周知の事實である。

これによつて其兒童の將來の發達についての推定をなすこゝもあまりに困難のこゝではない。

而して、將來各種職業の心理學的分析が完成し來れば、これによつて兒童の職業を選択するこゝが可能になり、また、各種學校の入學についての選擇をもなすこゝができるやうになるのである。

かくて、はじめ、人間が、その持つて生れた天分を享けて、この生を樂しむこゝができるのであつて、こゝに眞の人生の幸福が存するものである。余は、深く信じてゐるものである。

第三章 本能

一、本能の性質。燕は春の訪れと共に、われ等の國に來て、涼氣の漸く寒さを覺える頃南の國に去る。鳥はある時期になれば、巧に巢くふ。誰に教へられるこゝもない。たゞ彼等の體内に於けるある變化が、かくの如く行はしめるのである。勢よく走る車を見ては、幼き子供も避ける。人に傷けられんとして、幼きものも怒る。これまた、何人の教ふるこゝなくして行はれるこゝである。

かく、特定の刺激に對して、遺傳的に何等教へられるこゝなくして反應する、これ等特定の形式の反應をわれわれは、本能と名づける。

スポーツディングの實驗は、本能の理解について、助けとなることが多い。氏によれば、雛鴉は、何等學習をなさずして、よく餌を啄むこと

を知り、孵化の後四日にして、總ての動く物體に従つて動く。併しこの間目を閉ぢておくと、却つてこの本能は、あらはるゝことなく、動くものを見て逃げる。又一定期間、蠟を以つて兩耳を封じ、親鷄の鳴聲について、全く聞かせないやうにしておいても、雛鷄は、この鳴聲をきいてこれに近づくことができる。七面鳥と一緒に育てられた雛鷄も、やはり、鷄の特有の方法で啄み、鳥屋の内に、愛らしく鳴いてゐる雛も親鷄の警戒の聲に鳴きやめる。と。これ等は、本能が、特定の刺激によつて起り、しかも、いかに、學ばずしてなし得る反應であるかを明かに語つてゐる。

かくの如き本能が、人生にまつて、その位價值あるものであるかは、今更云ふの要もあるまい。われわれの日常の行ひは、實に、本能と習慣とによつて支配されてゐるこゝが多い。習慣をのぞいた吾々の日常生活、怒り、悲しみ、争ひなどは、みなこの本能によるこゝが多いものであつて、殊に兒童の生活

にあつては、この傾きの最も著しいものである。彼等は、未だ祖先の精神の遺産によつて生活してゐる事が多く、自己の經驗による、精神的活動は、成人に近づくに従つて、その貌をあらはすが、尙かすかである。

本能の現はす性質として、最も著しいものは、その一時性及定期性であらう。本能のあらはれるや一時的であつて、この時期にあつて刺激を與ふるこゝなくば、その現はれが弱く、時に消失するこゝがある。たとへば前述スボーディングの實驗もこれを示してゐる。又、哺乳動物の恐怖は、その生時にはあらはるゝこゝなく、また母親に對してはあらはれないものである。然るに、憤を生後直ちに、母牛から離して、二三週の後母牛と同一の厩で飼はうとするに、憤は切りに逃げたがるものである。これ即生後直ちにあらはれる養育の相互的の本能を刺激するこゝがなかつたため、これが消え失せたのである。里子に預けた幼兒に對して、母親の愛の足らざるが如き、この

一つのあらはれである。

本能は、また、そのあらはるゝに一定の時期がある。本能の定期性即これである。例へば、乳兒は、生れて直ちに、乳の吸引の運動をなすのである。これ即この時代の生活に必要なためであつて、モイマン (Meumann) が、兒童發達の法則としてあけてゐる、必要な機能は、その必要に應じて早く現はれる云ふものの一つの現はれである。

更に、本能には、必ず、濃淡の別はあるけれども、感情的側面を有する。情緒即これである。即情緒は、本能の感情的側面を云ふことができる。これを例へば、争闘の本能には、憤怒の情緒を伴ひ、好奇の本能には、驚きあやしみも云ふ情緒的側面がある。

かくの如き性質の人の行動を観察するに、甚だしく多様の行動を數へることが出来る。併しこれを、一つの系統によつてまゝめて見るに、凡そ左の

様な分類をなすことができる。

一、個體の本能。

1. 自己保存の本能。(本能的恐怖、争闘本能、好奇本能、所有本能等)

2. 適應本能。(遊戯本能、模倣本能等)

二、種屬保存の本能。(性的本能、養育本能等)

三、社會的の本能。(群居本能、優越本能等)

本能の分類、名稱については、其間に幾多の異説がある。マールケ (Marck) はこれを分つて、(1)主として運動的、(2)主として知的、(3)情緒の色彩濃きものと分つてゐる。カークパトリックは、之を目的論的に分つて(1)個體、(2)兩親、(3)社會的、(4)順應的、(5)調整、(6)其他としてゐる。ソルンダイクは、これを個人的と社會的とに分つた。これ等何れも、その主張とすると、こゝろをもつてゐる。余がこゝにとつたものも、やはり目

的論的の立場から、個體、種屬、社會に分ち、個體の中、保存と成長發達とを分つて考へて見たものである。勿論、便宜のためであつて、これを主張すと云ふ如き性質のものでない。各本能は相互に混じてゐることが多く、區分することは困難であり、かつ、かくの如き分類はこの場合、あまりに重要ではないから。

この中、個體本能とは、個體の保存と成長發達との二方面を含み、前者即自己保存の本能であつて、後者即適應本能である。かくて個體が生存するに至つて、こゝに種屬の生存を目的とする、種屬保存の本能があらはれる。この間に、社會的本能がまたあらはるゝに至るのである。

本章に於ては、主として兒童の生活を理解し、教養せんがために必要なものについて述べるつもりである。

二、本能の教育。 本能の教育方法について、ノースワージーは、三つの方

法をあけてゐる。即ち(一)用不用による訓練、(二)快不快の結果よりの訓練、(三)本能の轉換と醇化、これである。而して、これ等について考ふるべきは、殆んど吾々の考ふべきすべてをつくすことができる。

まづ、本能のあらはれんことを望むものを刺戟し、あらはれざらんことを欲するものは、これを刺戟せずして、かの本能の一時性と呼ぶ性質を利用して、んごするものが、用不用、を稱せられる方法である。たゞ、危険にしてしかも目を惹きやすい様なものを手の届く範圍の外におくこと云ふが如きことである。併し、本能的經驗は、ある程度まで必要なものであるから、かくしてすべての經驗を制限することは、將來を考ふる所以でない。

第二は、結果から来る快により、望ましき本能的行爲を獎勵し、不快によつて、望ましからざる行爲を禁じやうとするものである。この場合には、よくその起る場合を偶然のものたらしめず、一定の状態に於ける結果として、よ

く意識に残るやうにしなくてはならない。

併しながら、これ等の教育方法に比して、最も重要と思はれるのは、第三の轉換、及醇化の方法である。こは、原始的の反應を習慣によつて導いて、そのあらはれを轉じさせようとするものであつて、これに伴ふ感情を導き、かつ、知的の反省によつて、醇化に導くものが、最後に行かんとするところである。

これ等、本能の教育に於て、最も必要に考へられるのは、環境の整理と云ふことである。環境が整へられ、精選せられてゐるのでなくしては、その必要なる本能的行動を誘發しやう。これによつて、人が本能の調整を失ふた例は、こゝにあぐる違もない。また、ある行動に對して、その來るべき當然の結果によつて、その本能の教養を圖らうとする場合に、あたつても、これがいたすに不用意の中に繰返され、偶然の結果に支配されること云ふ様なことを避くるの要がある。

更に本能をよき方向に導いて、そのあらはれを醇化するには、上述の如く行はれる環境にあつて、更に經驗を熟視せしめてこれを導くため、また情緒をよりよきものたらしめて行くため、醇化された環境を選ばなくてはならぬ。かゝるが故に、本能の教育にあつては、環境の精選、整理と云ふことは、最も根本的に大切であること云はなくてはならぬ。

而して、これによつて、本能をよく固定せる習慣的反應に導くときは、いかなる環境にあつても、この定型の反應をつゞけて、亂れざる人格を得ることのできるのである。

家庭の父母、其他の家族、家庭の周囲の人々の教養、廣くはその社會の風潮等の環境によつて、人間の本能生活の進歩の程度に差あることは、特にこゝに強く附加して言ふの要がある。

三、個體保存の本能。個體保存の本能は生活の最も原始的條件に合する

ものである。従つて最も原始的の生活にあらはれる。こゝには恐怖、争闘、所有、及好奇の本能についてその觀察上、著しきものを順次述べよう。

本能的恐怖。恐怖のあらはれを、いつわれくが見るか云ふことは、恐怖の起元について見るに、明かになる。恐怖はもみ自己の保存を危くするものに對してあらはれ、行爲としては、逃走となつてあらはれる。雷鳴に耳を掩ひ、蛇を見て顔色を變へるに云ふものは、即これである。

恐怖のあらはるゝ時期は、人によつてその觀察を異にしてゐる。シン(Shinn)は二ヶ月目より三ヶ月目、メーシア(Majer)は三ヶ月目、ブライアー(Bryer)は四ヶ月目、サリ(Sully)は七ヶ月目から云つてゐる。こゝにかく、可なり早くよりあらはれるものである。

ホール博士は、兒童の恐怖の對稱として、雷鳴、爬蟲、大きな動物の接近、毒蟲類、暗黒、見なれぬ人、獨居、異様の高音、急音をあげてゐる。

これ等は、たゞ粗な觀察の羅列にすぎないが、こゝに恐怖にあらはるゝ本能の定期性について、パイル教授の觀察したところを述べておかう。

氏には、二人の子供、VとWがある。Wが三歳から四歳、Vは五歳から六歳の時に、兄のVは、蛆蟲や、爬蟲について、甚だしく怖れてゐるが、弟のWは、これに對して、何等の恐怖もあらはさなかつた。然るに、Vもまた三年以前には、何等これ等について怖れてゐるどころがなかつた。こゝ。

恐怖の本能程、明かに、一時性をあらはすものは、少ない。幼時に、何等恐怖すべき理由を持たなかつた兒童に、著しく脅かされた兒童の、雷鳴に對する反應は、甚だしく異なるであらう。一般に、不幸な經驗を有する——即個體の生存に危害を與へられた——人は、この恐怖が著しくあらはれるものである。一度地震の慘害を蒙つた人々は、微震にも戸外に逃走するに云ふこゝは、一般に事實である。

恐怖について、かく述べ來るべき、益なき恐怖をなさしむるこゝが人生に
 まつて如何に活動を阻止するものであるかを考ふるこゝができて、従つてこ
 の恐怖に對して、教育上如何にあるべきか云ふことが、明かになつて來る。

恐怖の教育に於て、最も注意すべきこゝは、いたすらに恐怖の對象を與へ
 ないこゝである。もし、両親がこのこゝに注意するとを怠るべきは、抜くべ
 からざる本能的恐怖の根を、兒童の心におろすとよなるであらう、子供の泣
 くべきに、「お巡りさんがきた」か、「ニアン」か云つて、これをおそれさせて、泣
 くのを止めんとする如きは、勿論愚劣極まる教育法と云はなくてはならぬ。

これと同時に、兒童の讀物或は活動寫眞、演劇等について多大の注意を拂
 はなくてはならぬ。幽靈物語の如き、或は血腥き怪談、演劇の如きは、いたす
 らに兒童の本能的恐怖を刺戟するこゝが多いのみで、殆んど何等の價値を
 兒童教養の上に存して居らぬと云つてよい。

こゝに一言附加したいのは、從來の學校教育、又は家庭教育の態度、即ち落第
 するぞ、先生に言ひつけるぞ等の脅し言葉を以つて、これ等をおそれしめて
 勉學に導かんとする態度である。かくの如くして、眞の動機よりして學ぶ
 こゝを止むるに至るが如きは、たゞに、いたすらに兒童の恐怖を強からしむ
 るのみならず、眞の努力の興味と價値との認識から遠ざからしめるもの
 と云はなくてはならぬ。

自己の足らざるをおそれ、道を外にせんこゝをおそれるなきの恐怖こそ、
 眞の醇化された恐怖と云ふべきであらう。

所有本能、蒐集本能物を所有しようとする本能的の傾向は、兒童の生活に
 は、可なり著しいものであつて、その喧嘩の原因の多くが、この所有から來る
 争によるこゝを見ても明かである。而して最も早くは、食物に對して起る
 ものである。乳兒が他人の乳を弄ぶを見て怒るこゝは、甚だ早くあらは

れる。また訓練なき兒童が、自分の食物の多少について不平を云ふことは、われわれの日常經驗するところであつて、これ等から漸次種々な方面に所有の本能的欲求が擴がつてゆくのである。

兒童が如何に「私の」云ふ語を用ひやうとするか。このすべてのものに「僕の本」僕の家」「僕の場所」云ふが如く、すべてに自己の所有をあらはさうとする傾向は、たゞ、その所有の本能的存在の強さを示すものである。

兒童の所有の欲求は、甚だ根強く深いものであるから、その利己的な態度は、われわれの社會生活に反した傾向を呈することが多い。「自分さへよければ」云ふ頃は、兒童の生活に、最もしばしば見るところのものである。かかるが故に、この傾向に對しては、一方親切同情等の社會本能的傾向を以つて、これに調和せしめる様はからなくてはならない。即これによつて本能的情緒の轉向をなさしむべきである。が更に一方に於て、この欲求をして物

質的のものより精神的のものたらしむることは、就中大切である。現代の人間は、あまりに物質的の所有本能が強烈で、しかもあまりに精神的欲求に恬淡ではないか。そこにあらゆる惡傾向の根がひそまるのではないか。世には、欲求の對象を、地位や物質において、勉學を奨むるが如き傾向がないか。かくて、玩具の多きをほこる兒童が、物質に憧がる、青年となり、地位における壯年者となり、終始、その欲求を物質所有におくに至つてゐるのではないか。われわれは、この所有の本能的統制によつて、兒童をして、自己の鉛筆を誇り、衣服の美を誇るを轉じて、自己の知識の多からんことを願ひ、清き人生に對する欲求を生ましめるようすることが大切である。

所有の本能が、少しく貌を變へてあらはるゝもの、即蒐集本能である。この本能の最も著しくあらはれてゐるのは、蟻や蜂である。これ等の動物は、冬期の籠居の準備のためその本能的行動があらはれる。人間の蒐集本能

は、かゝる明かな目的性を具へてゐるものではないが、その起原はやはり、この點にあるらしく思はれる。しかも、甚だしく普遍的のもので、あつて、ホル博士の調査によれば、この傾向の全くあらはれないのは、約十パーセントに過ぎない。兒童は、平均五種以上の蒐集物をもつてゐる云ふ。

この傾向は、三歳頃からあらはれ、十歳頃に最も盛んになり、十四歳頃になるさやゝ衰へて來るものである。

この關係は、バーク(Bark)の調査によつて、云つてゐるのであつて、氏によつて、其蒐集物の種類によりこの傾向の趨移を見れば、次頁の表如くである。

而して、約八歳に至るまでは、この傾向は、全く手當り次第であつて、何等一定の傾向を認めることができない。この時期にあつめられるものは、瓶、箱

年齢	男蒐集物の種類(平均)	女(平均)	平均
六	一、二	一、九	一、四
七	二、一	二、六	二、三
八	三、五	四、五	四、
九	三、九	四、一	四、
一〇	四、四	四、四	四、四
一一	三、四	三、三	三、三
一二	三、三	三、三	三、三
一三	三、五	三、四	三、四
一四	三、	三、	三、
一五	二、七	三、二	三、
一六	二、一	三、三	二、八
一七	二、	三、	二、五

針金、千代紙云ふ様なもので、田舎の子供なごになるさ、石や、岩片なごを集めるものさへある。これが約八歳以後になるさ、興味も一定して來て、やゝ目的性を以つて、心の要求に従つて集めるさ云ふ様になる。この時代に集められるものは、切手類さか、繪葉書さか、云ふ様なものが多い。

余は、過日、兒童の蒐集物の如何なる種類のものがあるかについて僅少な材料を得たが、これをその年齢などに關せずにあけて見ると、

男兒、繪本、繪はがき、フィルム、箱、マチのペーパー、切手、煙草の錫箔、乗換切符等。

女兒、おはじき、千代紙、人形、リボン、枝折等。

これ等の中、其年齢によつてあつめるものに、變化があることは、勿論であるが、材料が少ないから、その觀察は止める。

さて、かくの如き蒐集が、如何なる動機から來るか云ふことは、蒐集本能の性質を理解する上に必要なことである。まづ蒐集の何れを通じて見ても分量を多く云ふ欲求は、可なり著しい傾向の一つである。他人の模倣をして蒐める云ふ様なものも多い。されば、あめて居る子供に對して、何故集めるかを質す、「お友達が集めたから僕も集めるか」か「たくさんにしたから」か云ふ答をするものが多い。パークがこの蒐集の動機についての統計はこの關係を明かにしてゐる。(左表)

動機	男(百人に對し)		女(同)	
	模倣	競争分量	模倣	競争分量
用ひる愉快から蒐まつたものを見る愉快	七	七	一〇	一〇
美しさから記念として蒐めること	三	二	八	五
自身の愉快交換のため種類をあつめる愉快	四	七	三	二
競争	二	三	六	六
不定	八	八	四	六
其他	二九	二〇	二五	一五

蒐集の本能は、一見、くだらぬものゝ様に見えるために、成人が一笑に附するに云ふ傾きがありやすい。併しながら、後年研究の材料をあつめ、經驗の統一をなすに、あたつては、この傾向は重き役目を果すやうに思はれる。こゝに、吾々は、この無系統的な、でたらめな蒐集を、有系統的に導き、無目的より有目的に導くことが、この傾向に對する特に注意すべき考慮の一である。

好奇本能。好奇心云ふべき傾向は種々の場合にあらはれる。まづ、この傾

向の萌芽も云ふべきものは、ずつと早くからあらはれる様に思はれる。併し所謂好奇心を稱するものは、尙後年發達するものである。リボーは、好奇心に、三つの段階を區別し、驚き(Surprise)のやしみ(wonder)及所謂好奇心とした。このおそろきは、單純な、シヨツクの様なものをして指してゐて、光を見た時、色に目を向け、音に注意をするを、云ふやうなものを指したのであつて、極めて單純なものを云ふのである。第二の段階は、この注意が長くつゞくやうになり、ぢつと耳をすまし、目を見はるを云ふやうなものを云ふのである。これ等は、一般に感覺の發達の上に、その興味がいかに發達するものであるか、を云ふ問題として考へられてゐる。

感覺にあらはれる、好奇心の出現については、諸學者の研究を一瞥すると、興味が多い。今、聽覺及視覺にあらはれる、該本能的傾向につ

いてこれを見るに、次の如くである(スミス及ホールによる)

視覺についての興味發生の時期

研究者	單純なる光の感覺	受動的驚き	眞に物を見るはじめ	運動による視	色の興味	完全なる調整
シン	第一日	第二週の終り	第二十五日	一ヶ月	一年	八週
プライアー	同	第十一日	第二十三日	第二十三日	第二十三日	同
デーデマン	同	第二週の終り	第十三日(?)	第三十二日	第三週	八週
ホール夫人	同	第二週の終り	第二十八日	第三十二日	第三週	八週
ダーウイン	同	第九日	第六週	第六週	第六週	八週
ムーア夫人	第二日	第九日	第六週	第二十八日	第十五日及第二十	八週

音に對する興味發生の時期

研究者	はじめて注意した時	はじめて音を喜んだとき	頭をめぐらして音の方を向く
シン	第三日	第二十七日	三ヶ月
プライアー	第四日	八週日	第十一週

テイ マ ン	ホ ル 夫 人	ダ ウ イ ン	ム ア 夫 人
第三時	第四十日	第六週	第二十一週
第二日	同	第二十日	第四十九日
			第三十日

これ等の記録は、育兒中に起ることであつて、すべての人々の観察し得ることである。かくて多くの人々の記録によつて、その一般の傾向を定め得るのである。こゝにある記録によつても、われわれは大體の傾向を知るに足りる。

所謂好奇心が著しく現はれて來るのは、一年の終り頃からである。この頃には、自らも實驗して見る様になる。其最もはじめは、これより少し前に起る所謂 *look and key* と云はれるものであつて、母親の耳の穴や、鼻の孔などに指をさし入れたり、節穴に指を入れて見たりするものである。一年の終

り頃になれば、自ら物を観察しやうとする態度があらはれて來る。即ち物を見るばかりで満足することなしに、觸れたり、なめたり、嗅いだりして、手のごく限り、いろいろなものを手にしたがる。包の中のもの、箱の中のもの、引出や、籠の中のもの、をすつかり出してしまふ様なことは、この時代にははれるものであつて、隠れてゐる中のもを見やうとする、好奇心に外ならない。

自然に對する好奇心は、まづ大體滿一歳以後急に發達するものである。幼稚園の下級の幼兒なごには、植物の生活や、動物の生活に非常に興味をもつものがあらはれて、播いた種子の生長を見やうとして、今日掘り出しては、その昨日とごんなに變つたかを見、明日になるごまた掘りだして昨日とごんなに變つたかを見やうとするやうなごは、しばしば見るごころである。これなごは、植物の成長に對する好奇心の現れの明かなるものゝ一である。

また花の蕾がいかなる状態になつてゐるかを見やうとしてみたり、むしりこつて中を開いて見たり、猫や犬の目を大きく開いて見たりするのも、この時代の好奇心のあらはれである。

この種好奇心は、一見いたづらに見えるがために、これを禁止したがる様なこまがしばしばある。言ふまでもなくこれ等は、所謂研究心の萌芽であるから、充分これに對して、觀察の精密を期せしめて、これを指導しなくてはならない。これを常に禁止する様なこまがあれば、兒童は何に觸れて吐られないですむかこ云ふこまをのみ心配して、遂にこの大切な本能的傾向を消失し、微弱ならしむるに至るものがあるであらう。

この實驗的の好奇心も、最も著しく関連して見ゆるものは、八歳から十歳位の子供にあらはれる、煙草を吸つて見やうとしたり何物によらずこれを味はつて見やうとしたりする傾向である。

パークは、この兒童が火をつけてすつて見ようとするもの、種類について調査して見たが、木の葉、莖、藤、種子、等すべて火のつくものは、これを吸つて見ようとする傾向があると云つてゐる。

かの成人が煙草を吸つてゐるのを見て、これをまねて吸ふのは、一は模倣であるが、一はこの實驗的の好奇心によるものである。この場合には、多少の不快があつても、この本能的の傾向が強いために繼續して、遂に喫煙の習慣を得るに至るものもある。かの幼少の頃から喫煙の習慣を得たものが、喫煙者中に少なくないのは、この關係であらう。

十歳から十二歳頃までは、單に自分が實驗して見るに止らず、動物や植物がある事情の下に於て如何なる變化が起るかを試して見やうとする傾きがある。犬に鹽をなめさせたり、猫の後足を捕へて歩かせて見たり、帽子をかぶせて見たりするのは、やはり、この實驗的の好奇心の一つのあらはれで

あらう。

かくの如きものの中には、一見慘酷に見ゆるものもある。蜻蛉の翅をむしりこつてまはせて見るこ云ふ様なのは、その一つである。併し、これ等が眞に残忍な要求があるものであるかは疑問である。全く残忍な動機からこれが出てゐるか否かは、よく観察した上でなくては云へない。多くはこの種好奇心の一種のあらはれであつて、さしてこがめるの要もないものと思はれる。もしまた眞に残忍の動機のみから來るものがあれば、其兒童は一種の性格異常を有するものこ云はなくてはならない。この種兒童には尙他にもかくの如き變質の徴候を認めるこができやう。

次に好奇心の發達は、質問こなつてあらはれる。この好奇心のあらはれは、人間の發達の上に重要であつて、研究する價值の多いものである。

スミス及ホール二氏は、この時期の質問を六種に分つてゐる(一)自然力に

關するもの(二)器械力に關するもの(三)生命の起元に關するもの(四)神學及聖書に關するもの(五)死及天國に關するもの、及(六)質問癖これである。わが國に於ては、聖書に關するもの、天國に關するものこ云ふ如きものは少ない。しかし、大體この外の五種に、兒童の質問は、分類して考へて見るこができやう。この中質問癖は、一種の病的徴候こ云ふべきものであつて、かの矢次早に質問する子供には、低能兒が多いこ云はれてゐる。そこで、先の五種のものについて少しく説明しておかう。

自然に關する質問こは、誰が太陽が作つたか、何故星がまたたきをするか、何故蟲は鳴くか、こ云ふ様な質問であつて、太陽、月、星、雨、雲、風、雷、火、水、植物、動物等あらゆる自然界の存在に對して質問を發するものであつて、兒童の質問の七五%位まではこれであるこ、ホール博士は云つてゐる。自然現象に對する知慧の芽は、こゝに漸く開けて來るのである。

時計は何故に動くか、汽車は何故走るか、云ふ様な器械の働きに關して質問するものは、こゝに云ふ器械力に關する質問の中に入るものである。この質問は、やゝ貌を變へて自ら器械を分解して、その秘密をさぐらんとする好奇心となつてあらはれる。

第三のものは、赤ちやんは、どこから生れて來たのか、生れる前に僕はどこにゐたのか、云ふ様な質問これである。フロイド(Freud)等精神分析の立場から云へば、これ等は性に關する興味の様でもあるが、やはりこは、單なる好奇心として見る方が正常な見方ではあるまいか。

神に關し、佛に關しての質問は、本邦のやうな、兒童が宗教的雰圍氣の中に育たない場合には起るこは少ない。併し朝夕、神佛を禮拜し、神を説く家に生れた兒童に於ては、この種の質問の出づるこは、當然の事云はなくてはならない。

死に關する質問、天國又は地獄、極樂等に關する質問の如きは、やはり、前述の様な境遇にあつて、はじめて生れ出づる質問ではあるまいか。しかし、一般に前者の觀察に従へば、死に關する質問も多少はあらはれる云ふ。多數の中には、これを經驗する人があらうかと思ふ。

以上述べ來つた好奇心については、最も注意、深き適當な教導が必要であるこは、すでにさころこに述べて來た。云ふまでもなく、好奇の本能は、あらゆる進歩の基をなすものであつて、この好奇心がなければ、世界の進歩は、今日の如くでなかつたらう云ふこは、少しの誇張もなく云ひ得る。自然に對する好奇心、實驗的の好奇心、質問となつてあらはるゝ好奇心、すべてこれ皆、兒童の知的のめざめを意味してゐるものであつて、これから、彼等の知慧が進歩の門出をするものである。ニュートンが、林檎の上から下へ落ちるのに不審を懷いたのも好奇心ではなかつたか。

吾等の従來の教育は、餘りに成人の興味を中心にして行はれすぎた。教育の理想のみを考へて、被教育者の本性を省みなかつたためである。これがために兒童にふさはしき智慧の芽出しに對し、成人がこれを一笑に附し一喝の下に中止せしめる様な、残酷な取扱ひ方が少なくなかつた。これからのわれわれは、兒童のなすところをぢつと見てゐて、その内に潜むものを見出し、これを導くやうにありたいものである。

最後に附け加へておきたいのは、既にのべた器械力の不思議を自ら解かんとするのために、器械を分解せんとする好奇心のあらはれである。これ等は就中兒童のいたづらとして解されて、叱責のみが報ひられたことが多く、しかし、こは、明かに器械の構造等に關する、健全な好奇心のあらはれと見なくてはならぬ。されば兒童の日常接する器械たゞへば、時計、音楽器、人形の如きを破壊することゝ最も多い。これ、これ等の器械力に關しては、最も彼

等のあやしみが著しいからである。

破壊されたもの	男	女
音楽器具	四四	二二
時計	五七	二五
人形	一一	六六
器械玩具	二〇	二二
寒暖計	二	二
中を見るため	二二	三一
其他	一一	一六
計	一六八	一八四

ホルルの統計的研究はこれを明かにしてゐる。即上の如くである。男女によつて多少その趣を異にしてゐるのを見ることができる。

これが、少しく成長した兒童に於ては、——九歳乃至十二歳位の兒童——この破壊したものを、更にまた組立てやうとするやうな傾向があらはれて

來る。こゝにこの種好奇心は、一段の進歩を遂げたもの云はなくてはならない。

これ等の好奇心は、前述の如く、甚だしく誤解されて來たこゝが多い。これ即成人の利益と衝突するがためである。しかし、この貴い探究の芽生のためには、一の器械一の玩具のそこなはれるこゝは、償はれてあまりあるもの云はなくてはならぬ。

争闘本能。自己保存の本能の中、最後にあけるのは、憤怒、即争闘本能である。この本能は、他の本能的傾向の阻止された場合に起るものである。こゝにふこゝは、マクデューガル、カークパトリック、ソルンダイク等の學者の一致した説であつて、ためにこゝは、第二次的本能と稱せられてゐる。即争闘本能は、自己の追究を障害し、或は幸福を障害されたときに、個體の維持を主張する本能である。こゝはなくてはならぬ。

かゝるが故に、この本能のあらはれる場合、あるひはその發達を叙するこゝは、困難である。

併し、怒りの表出は、身體の發達と共に變化して來る。赤兒は怒ると、身體を堅くして足をしがき、呼吸をつまらせて顔を赤くして遂に泣くが、次には怒ると、押したり、けつたり、もがいたりし、更に發達すれば、蹴つたりひつかいたり、足をふみつけたりして、遂に喧嘩と云ふ表出までに至るものである。ワットソン(Watson)は、幼兒の憤怒についての實驗をしてゐる。

怒りをいかに教育すべきか云ふこゝについては、種々の意見のあるこゝである。子供が怒つた場合にも、時には、その當然の結果として來る苦痛と後悔とをなめさせなくてはならないこゝもあるし、放任しておかなくてはならないこゝもある。これ等は、怒りの原因が多様であるに従つて、一言

もつてかくの如きはかくせよ云ふことはできない。

争闘の本能が、社會の進歩に利益してゐることは、マクテューガルも云つてゐるこゝであるが、こゝは社會の進歩の早き頃に於て然りであつたのであつて、漸次かくの如き傾向は、減退して來るやうに思はれる。殊に隣人の鼻を挫いて、その満足を買ふ様なことは、あまりに喜ぶべきこゝでない。たゞわれ／＼はこの本能を導いて、われ／＼の正義のため、他の正義のために、怒らしむるこゝ云ふ様にしないでならぬ。現代は、あまりに正義のために、怒ふの士に乏しいのである。

四 適應本能。すでに個體の保存は、上述の本能によつて遂げられる。

更に個體の生長と發達とのために、遊戯と模倣とは、大切な本能的傾向の一と云はなくてはならぬ。

遊戯。一般に遊戯が何故に本能的にあらはるゝか云ふ事については

種々なる説がある。或は、勢力剩餘説と云ひ、あるひは、生活準備説と云ふ。

併し乍らこれ等についてよく考へて見るに、兒童の多くの遊戯活動は、人間進化の過程に於て、過去に何等かの説明を見出し得るものが多く、しかも遊戯それ自身は、現在又は將來に向つての活動に對して、準備的なものであつて、その發達、成長に密接なる關係をもつてゐるものであると云ふこゝに於て、重要な意義あるものである。故に個體の正常な發育は、兒童期に於ける遊戯の適當な種類と順序とによつてもち來されるものである。種々なる作業が兒童期の發育に於て資するものではあるが、遊戯程變化の多い筋肉活動と、複雑な精神活動とをもつてゐるものはない。

兒童の遊戯に對する興味は、幼少の頃は、比較的單純であるが、年齢が進んで種々な精神内容が現れて來るに従つて複雑となつて來る。七八歳以前の幼少な兒童にあつては、一般の身體各部分の活動によつて、感官と身體器

官の試練をなさうとする傾向がある。この場合の最初の運動は粗であつて、出鱈目に見ゆるものである。而して又この時代の遊戯は全く個我的であつて、形式にあてはまつたものでなく、自己の世界を發見せんとし、自己の用に供せんとするものである。即遊戯は、一人遊びの時代で著しい玩具時代を云ふことができる。

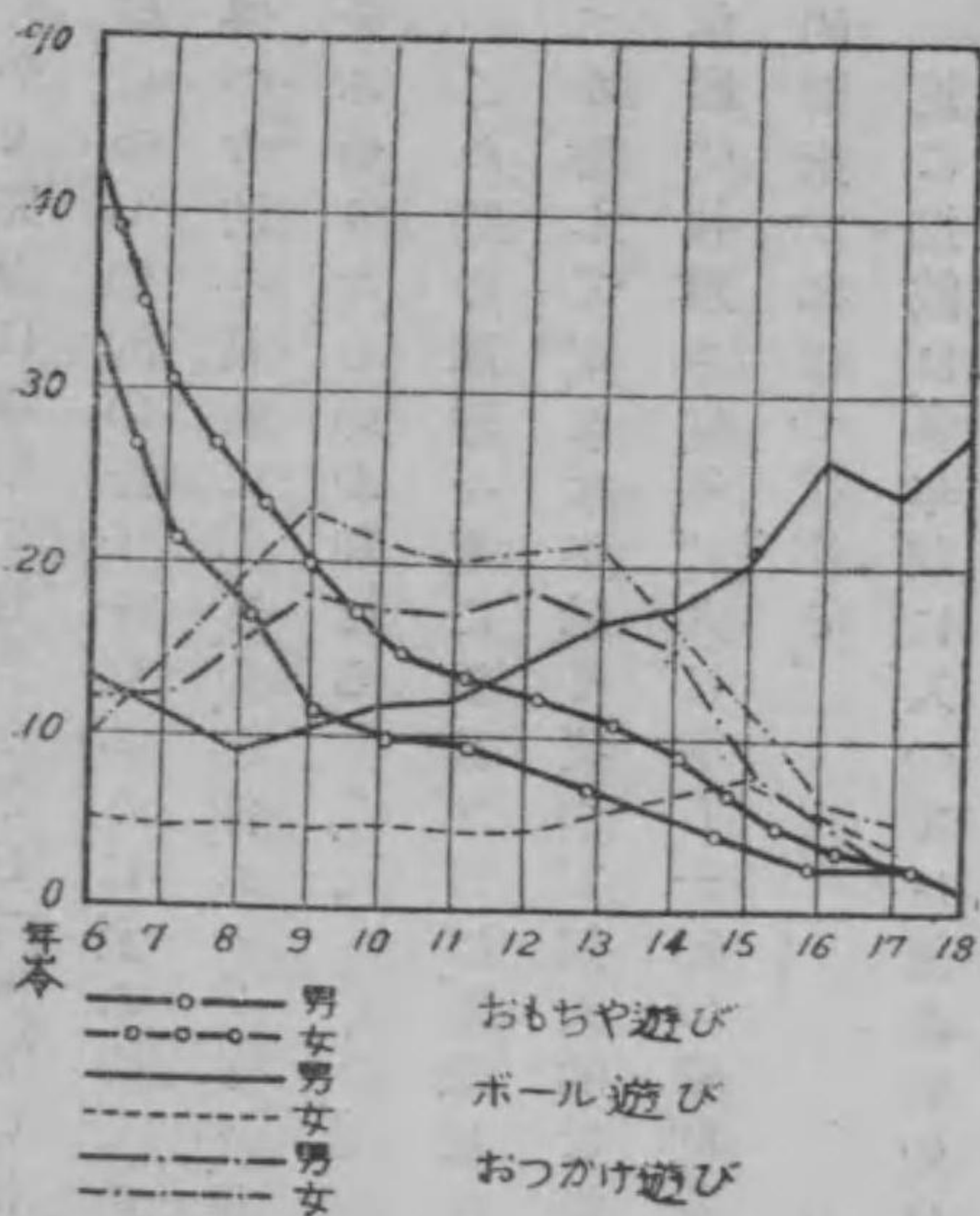
七歳から十歳頃までに於て、兒童の遊戯は一轉機を劃する。即一人遊びが廢れて、これに争鬭的要素が加はり、著しく競争遊戯を好む様になる。ジョンソン(Johnson)はこの時代の遊戯として、かくれんぼう、猫遊び、子捕り、鬼ごっこ、陣取り、くろんほあそび、蠟燭あそび、ベースボール、弓遊び、繩遊び、めくら鬼、豆囊運び、中てこ、舞踊等をあげてゐる。これ等は、いづれも、粗な競争遊戯であつて、全きもの云ふことはできない。しかも身體のはげしい運動を伴ひ競争の要素を含むものである。

やゝ完全に競争の性質を帯びて來るのは、十歳以後のこころであつて、即遊戯にやゝ知的の分子を交ふるに至るのである。前述の遊戯も漸次その競争の方法を精密にして、尙、游泳、スケイティング、模倣的遊戯、射撃、フットボールに云ふやうなものが加はる。(ジョンソン)

これ等の状態を更に換言すれば、遊戯は年齢と共にその競技性、娛樂性を増して來、また年齢に従つて個人的な遊戯は社交的となり、身體精神の活動の複雑さは、年と共に増し、一定の目的を求めらるやうになつて、遊戯の知的要素が加はつて來る。

更に遊戯は、青年期に入つては、遊戯者の自己に對する價值を知り、知的要素になつて遊戯の方法を統制するやうになつて、所謂スポーツマンシップを生ずる。かゝる時期になつては、遊戯は、その個人によつてその範圍を限定し來り、一種の遊戯にのみふける様になるものである。併しかくの如き

こゝは、兒童に於ては、殆んど全くあらはるゝこゝもなく、廣き範圍に、あらゆる遊戯をなし、自由に遊ぶのである。



これ等の關係は、クロスウェル (Crosswell) の研究による上掲の曲線圖に明かにあらはれてゐる。
これによつて一人遊びの代表たる玩具遊びが、また年齢と共に減退するか、また、第二の兒童期に於ける疾走的の競争遊戯の代表たる追かけ遊びが、いかに七八歳頃から著しく盛になり十三歳頃

より衰ふるか。更に、知的分子の加はつた競争遊戯の代表としてのボール遊びが、いかに年齢を追ふて發達してゆくかを見ることのできる。(この圖は兒童の幾何パーセントがその遊びに熱中するかを調査したものであつて、曲線の高き程その人數の多きを示すのである)

遊戯の人生に對する價值について今更云ふまでもあるまい。兒童は、その無心な遊戯に於て、時に物を速かに觀察するの能を練り、時に判断を早くする働きを練り、また、物に注意するこゝを練習をすることが出来る。遊戯によつて學ばれるこれ等の働きは、他の何物にも優つてゐるのである。遊戯をなさざる兒童の不幸は、云ふまでもない。

更に長じては、共同作業の價值を知り、他人の權利を重んじ、規則を通じて自由の意義を學び、遊戯活動の後に來る疲勞の弛緩の貴さをも味ひ得るに

至るのである。多くの學者によつて、遊戯が何よりも價值多きものであると云はれて來たのも少しも怪しむに足らないのであつて、遊戯をなすことを忘れた兒童は、兒童期の最も多くの、かつ立派な愉悅を奪はれるばかりではない、完全な成人となることができないと云はなくてはならない。これ人生を形造る最も大切な時期に、その最も大なる要素が参加しないためである。

かくの如く遊戯は兒童の心身の發達の上に大切なものであるから、これを適當な監督の下に充分發達せしめることは、兒童教養上最も大切である。このためには、まづ第一に兒童の遊戯をして最も自由に充分に發達させるために、遊戯の場所を必要とする。遊戯の場所がなければ、遊戯の自由なる發現を助け、精神的迅速を増さしめるやうなことは望むことができない。畢竟、自由なる疾走、活潑なる飛躍をなし得るにあらざれば、遊戯はそのほん

さうの性質をあらはし得ないからである。この點に於て、現在のわが國の大都市の兒童はいかに不幸なることであらうか。彼等は飛びまはる場所がない。自由なる遊びは、車馬の往復にさぢられ、しかもそれなきところを見出すこともできない。であるから、現在の大都市に於ける兒童遊園の設置は、あらゆるものに先だつて、兒童保護の上に最も大切なものである。その一面として、せましきは云へ、學校の運動場を開放することも望ましきことの一つである。これによつて、兒童心身の開張を期し得るならば、敢てその費用なきは、おしむに足らないではないか。

次に遊戯の監督指導上に注意すべきは、兒童のなす遊戯の種類は、兒童自らの發動によるものでなくてはならないと云ふことである。これがためには、兒童の遊戯の發達を了解してゐなくてはならない。兒童の心に副はない遊戯を課し、成人の考へによつて遊戯の内容を規定するやうなことが

あれば、遊戯の價値は、全く失はれるものと考へなくてはならない。同様に成人が兒童の遊戯に干渉し過ぎるときは、これまた遊戯の價値を失はしめるものである。幼稚園の下級に於ける團體遊戯の如きは、これ等發達の點から考へて充分の疑問をおくものである。即ちこの時代の兒童は獨り遊びの時代であつて、放任しておくべきはいつも、獨りで遊ぶのに幼稚園に於てのみ、多くの幼兒とつながつて遊戯するのであるから。

從來の教育に於ては、この遊戯の本能を、あまりに蔑視し、甚だしきは危險視してゐたことが多し。遊ぶことには、一種の罪惡視されてゐたかの感がある。たゞ唯一の勉強——机の前にすわつての——ことのみが價値あるものゝ如く考へられて來た。併し乍ら、遊戯によつて學べる、甚だ多くのものゝあることは、前述の如くであつて、われわれは反つて、今より一層遊戯を獎勵しなくてはならないのである。

更に、兒童生活に於ける望ましき反應が遊戯の一部となるに於いては、教育は、確實な成功を勝ち得たものと云ふことができよう。バイルは、遊戯は學校作業の妥當なる類型であつて、兒童生活發展の最も自然なる通路である、と云つてゐる。從來の教育は、あまりに形式的であつた。兒童の興味如何をも省みず、その本性の上に立脚もしなかつた。學校作業は、たゞあくびの原因たる感さへあつたように思はれる。余は、兒童の勉學を、この本能的基礎に結びつける事は、バイル教授と共に、最も妥當なることの一と考へる。

模倣。模倣が果して本能と云はるべきものであるかについては、種々の異論がある。ある學者は、これは習慣の一種であること云ふてゐる。併し、こゝにはやはり本能の一つと見て考へて見る。

模倣の大切な意味は、適應本能としてに存する。即ちその生活を發達せし

める上に於て、生活の様式を學び言葉を覚え笑をおほえるのは、即このはたらきによるこゝが多い。單に家庭に於て生活の様式を學ぶに止らず、學校に於て、讀み方を學び、算術を學ぶのも、この模倣の機能によつて果されるこゝが多い。

單に學ぶに止らず、了解の手段として、また大切な機能をなしてゐる。即模倣は、これによつて、眞に納得するこゝのために必要である。模倣をして見るこゝによつてなるほゞ首肯されるこゝは、われわれの日常の經驗にも少なくない。

かくの如き模倣も、二歳位では、成人の活動を繰返さうと云ふ態度があらはれて、これがだん／＼複雑になつて來るのであるが、尙粗笨な模倣たるにすぎない。これが年々共に精細な模倣をしなくては、満足しないやうになる。たゞへば、遊びにあらはれる模倣について云つて見れば、まゝこゝに於

ては、幼少の頃にあつては、木の葉に土の團子で満足したものが、漸く長ずるに及んでは、玩具によつて、精細な模造品を弄ばなくては、満足しない如き、これである。

模倣は何等模倣せよと云ふ様なこゝはなくても、おのづか兒童生活にしみ入つて、他の行爲の模寫をあらはすものである。兩親の生活の様式が自然にその子供にあらはれるやうなのは、この模倣たる場合が多い。かゝる模倣については、しばしば笑話が傳へられてゐる。ある子供は、幼稚園でお父さんごつこをしたとき、急に急にはだかになつて、あぐらをかき手をたいてビールをもつておいでと云つたとき云ふ。これは日常父親のする行爲を見てゐてこれを模倣したのである。

模倣について、特にこゝにつけ加へておかなくてはならないのは、反對暗示と云はれてゐる現象である。こゝは一見模倣とは全く異つてゐる様に見

えるが、その根本に於ては、全く同一のものである。子供によつては、あれをしてはいけません、云ふ時に、たつてこれをする様な兒童がある。また時によるに一般の兒童にかくの如き現象があらはれることもある。これ等は、その與へる活動に對する禁止が、時としてその活動に對して特殊の注意を喚起し、しかも尙禁止せられた心に争闘心を喚起して、これが活動を抑制し得ざらしむるに至るものである。

かくの如くであるから、必要のない悪事の例を示して、かくの如きことをするべからず、云ふ様な命令をするに、しばしば其命令した人の反對の行爲に出づることがある。これについて、バイルのあけてゐる例は、興味あるものである。新に田舎に赴任した一教師が、就任の當日兒童に向つて、運動場の一隅にある小舎によぢ登るべからず、云ふ不必要な禁止をしたところ、兒童は從來かゝる小舎のあることさへ知らなかつたのに、その日には、す

べての兒童がその小舎にのほつて、これをふみつぶしてしまつた。明かな反對暗示の説明になつてゐる。

一般に、教育上、模倣の本能の存在に注意しなくてはならないことは、これ等の事實を観察したところによつて、明かであるであらう。

五、社會的本能。 人が、單獨で生活しないこと云ふことから、種々の所謂社會的本能が生れて來た。社會的本能の中に數ふべき諸種の本能に如何なるものがあるか。まづ所謂群居性本能、他人に認められんとする傾向、他人の嘲笑を避ける傾向、優越の本能、服屬の本能など云はれてゐるものは、こゝにあけらるべきものであらう。

甚だしく幼い子供でも、一人であること泣くが、多くの人と居れば、喜んでゐること云ふ傾向がある。即人は孤獨をおそれ、徒黨と共にあることを喜ぶ本能的の傾向がある。これを稱して、群居本能と呼ぶ。

未開の時代にあつて、人間の生活を維持するためには、食物を得んためにも、自己の身體を保護せんがためにも、群居して居る必要があつた。この共同作業のために、群居本能は、生れて來たものであると云はれてゐる。人が社交的動物であること云ふのは、このあたりの消息を傳へたものと見られるであらう。

この群居性の本能は、すでに述べた遊戯に於てもあらはれた様に、年々共に著しくあらはれて來て、はじめは單に孤獨を嫌ふに止るが、漸次その仲間を求めて、徒黨をつくる様になるものである。はじめは、家庭に於ける一種の社會生活を以つて満足するが、漸次同じ位の年齢の徒黨を求め、やうになる。父母は時に自分の最愛の子女が、自分等と遊ぶのに満足しないで、他家の子供といかにもむつまじく遊ぶかを見て慚汗することがある。殊にこの傾向は、所謂青年期以前期に於て著しい、即ち十一歳から十五歳位の間

に著しい傾向を形作るものである。シエルドン(Sheldon)の調査によれば、千百三十九人の男兒童の中に、九百三十四の異なる徒黨と、千百四十五人の女兒の間に九百十一の徒黨のあることを發見した。パフェル(Parker)は、四人の中三人の割合にはこの徒黨をもつてゐると云つてゐる。いかにこの傾向が強くなつて來るかを知るに足りる。

この間に、家庭に兄弟をもつ兒童は、自らそこにこの本能的傾向の満足を求めることができ、所謂一人子には、これを求めることができないために、一人子の精神には、一種の異なる状態を呈するを常とする。即如何にしてか徒黨に入らんとして、早く服屬の本能をあらはし、他の兒童に阿諛して徒黨に入らんとし、または、犬や猫にその遊び友達を求めると云ふ様な傾きがある。

この一人子の傾向をよくあらはして居る一節が、二葉亭の「平凡」にある、今その一部をこゝに、例としてあげておかう。

家の横町の角まで来て、くすぐつたいやうな心持になつて、そつと其方角の方を觀る。果してホチが門前へ迎へに出て居る。僕を看附けるや逸散に飛んで来て、飛付く、舐める。何だか「兄さん！」と言つたやうな氣がする。若し本包に、辨當箱に、草履袋で兩手が塞がつてゐなかつたら、僕は此時ホチを捉まへて、何をやつたか分らないが、それが有るばかりに、どうする事も出来ない。據どころなく頭を撫でて遣るだけで、不承々々、また歩き出す。と、ホチも忽ち身を曲らせて横飛にびよいと飛んで駈出すかと思ふと、立止つて私の面を看ておどけた面をする。かうしてふざけながら一緒に歸る。

玄關から大きな聲で「只今！」といひながら、内へ駈込んで、いきなり本包を其處に抛り出し、慌てゝ辨當を開けて、今自のお菜の残り一と稱して、實はたべたかつたのを我慢して、半分残して来たそれをホチ

にやる。それでも足りないで、おやつにお煎を三枚貰つたのを、せびつて五枚にして貰つて二枚はたべて三枚は又ホチに遣る。

それから庭で一しきりホチと遊ぶと、母がきつとおさらひをおしと云ふ。おさらひ程私の嫌ひな事はなかつたが、これをしないと、すぐホチを棄てると言はれるのが辛いので、濫々内へ入つて形の如く本を取出し、少しばかりおんによこによことやる。それでおしまひだ。

教育が、この社會生活の基礎をも云ふべき、徒黨本能又は群居本能に對して、適當な態度をさるゝ云ふことは、當然のこゝと云はなくてはならぬ。然るに、従來の教育に於ては、この方面に注意をはらつて来たか否か云ふことには疑問がある。兒童の間に組まれる徒黨が、學校を基として組織されるこゝが少ない。これ明かに、現在の教育、殊に學校教育が、この方面の本能の満足と與へて居ない證である。學級はそれ自身、社會であつて、この間に

於て、兒童の社會的本能の満足が行はれなくてはならない。こゝに競走の仲間を見出し、こゝに遠足の仲間を見出さなくてはならぬ。然るに教育が教授に偏するため、學級の組織は、知的、形式的となり、かゝる本能的傾向あるを忘れてゐるかの感がある。修學旅行や、遠足などに、兒童が如何に歡喜してこれをまち、これに加はるか、云ふことを見ても、學級の組織について一層この方面の考慮の加はるべきの當然なるを考へしめる。

更にこの團體的生活によつて、同情、親切等の社會的本能を刺戟して、これを助長させることができる。また、争鬭、所有等の本能についても、この生活を導くことによつて、いたづらなる争鬭の心を和け、個人の占有よりも多くの人の共通の所有が、一層満足なる結果をわれ／＼にもち來すかを知らしめることができるのである。余が先にも云へるが如く、これ等の本能を轉向せしめる方法は、この社會的本能の導出によつて、ゆくのが最も賢い方法

と云はなくてはならぬ。

社會的本能はかくの如き廣き仲間を求めるのが正常であるが、時に兒童は、親友をもつてこの満足を得るに至ることがある。こは、一面よい點をもつてはゐるけれども、いかに完全でも一人によつては性格の全部が練られること云ふことはできない。兒童の親友に就ては特に注意するの要がある。

社會的本能として、こゝに尙一言つけ加へておきたいのは、名譽の欲望、即他人にほめられんことし、他人に嘲笑せられざらんことを、傾向である。成人であつても、獨り室にあるとき、室を出で、公衆の前にあることは、その心地に相違のあるものであつて、その根本はこゝにある。これ等の本能は、これを導くに於て、多くの注意を要する。結局は、すべての行爲について、自己の非難を稱讚に生かしむる様すべきではあるが、こゝに至るまでに、幾多の段階を要することは云ふまでもない。

他人に優越せんとし、優秀なものに服屬せんとする傾向も可なり著しいものである。これ等の本能的傾向は、争闘の本能と相似た點が多い。兒童は、教室にあつても、朋友とあつても、苟くも一人でない限り、競争をなし、いかなる點にか自己の優越を見ざれば已まないものである。しかも、いかにしても及ばざることがわかれば、兒童は、その優越なるものに、隸屬して生活せんとする傾向がある。優越の本能的傾向も、自己の眞の價値に對して自信をもち、服屬の傾向も正しきものに服屬するの傾向を導くように醇化してゆくべきではあるまいか。

以上、余は、兒童の特に著しく現はすやうに思はれる本能的傾向について大體の觀察をこれが誘導について述べた。この外尙、種屬保存の本能、性の本能、養育の本能等も、雖も、兒童生活に現はれないのではない。兒童が異性の兒童の前には、一層自己を誇大して見せんとし、女の子は、先天的に子供

を喜び人形の遊びを好むと云ふ如きいづれもこの方面のあらはれを見べきであつて、これを善導してゆくことの大切なのは、云ふまでもないのである。たとへ併し、これ等の本能的傾向は、兒童期に於ては甚だ微弱であつて、青年期以後に著しいものであるから、こゝに省いたのである。

本能の教育は、繰返して云ふまでもなく、最も大切な教育の機能であり、殊に、幼兒期、兒童前期に於ては、個體本能の教育にその大部分の力をさかなくてはならぬ。兒童の知能の眼ざめは、未だこの時代には著しくないのであつて、こゝに習慣教育の必要が考へられて來るのである。

第四章 習慣と教育

一、習慣の形成とその効果。本能が遺傳的の反應であること異つて、習慣は特定の刺激に對する後天的反應である。即ち本能は何等學ぶことなくして行はれるものであるが、習慣は、生後學ぶことによつて成立するものである。而して、本能と習慣とは人間の生活を形作る重大なる要素であることは云ふまでもない。われわれの日常生活を支配する理性の働きがいかほど弱少であつて、本能及習慣によつて營まれる部分の多いかは、少しく考をめぐらせば、直ちにうなづかれることであつて、テイチナー (Titchener) 教授が「人は殆んど考へて生活することがない」と云はれてゐるのは、眞に同感に堪えぬ言葉ではないか。

盆の上におこした水滴は、盆を傾ける時にその何れへ流れることもないが

一度、指の先でこれを導くときは、その他の何れの方向へも流れることなく、たゞ一すぢにこの道を通れる。而して再びその場所へ水滴をおこして傾くるときは、何等導きなしに、水の流れは、一定の方向に營まれる。習慣の形成されるのは、かくの如きである。かつて腕巻の時計をしたことのない人が、これをするときは、はじめは、いづこを見て時を知らうとするかを常に注意を払はなくてはならないが、かくの如きことを繰返すうちに、遂には、何等の顧慮なくして時を見ることができる。右にせる時計を、左にしても同じ経験が得られるであらう。學年のはじめに、未だ講義室の何れにあるかについて、しばしば、間違ふ教師も、講義の進むに従つて、教室をわすれる様なきことがない。かくて、習慣は、一定の徑路に従つて、反復される神經興奮の器械化の現象であること云ふことができる。時を見ること右の腕を見ること云ふ一つの過程が、反復されることによつて、これは殆んど何等の顧慮を用ひること

なしに、器械的に行はれるやうになるのである。

余は今何等の顧慮なくして、器械的に行はれること云つたが、これ習慣のもち來す結果であつて、これが内容は、分析するに従つて、多くの枝に分れる。先づ習慣を完成することによつて、行爲は、一層正確に、迅速に、しかも目的に合つて行はれる。はじめは、思ふやうにゆかない。従つて不正確で間違が多く、しかも遅いこと云ふことは、すべての人の経験するところであらう。たゞ、さへば、タイプライティングの練習をなす場合には、はじめは、そのたゞかんじする鍵をたゞくのが、容易でない。Aをうつたと思ふときに、Uをうつたり、Bをうつたと思ふときに、Kをうつたこと云ふ様であつて、これをうつ速度もおそくしかも、この過程にあつては、間違が多い。しかるに練習の進むに従つて、殆んど何れにAがありBがあるかを考ふる間もなく、速かにうち、しかもこの時の方が誤は漸く少なくなり、手は漸く迅速に動く。

これ等の効果の上に、尙習慣の形成せられるに従つて勢力を用ひるこゝが少なく、従つて疲労は習慣の形成せらるゝに従つて減少する。タイブライディングにあたつて、いかに、はじめの三十分練習後の三十分の疲労の程度の異なるかを考へて見れば、直ちに明かなこゝである。手工の時間に兒童は、一二本の釘をうつてさへ疲労するが、指物師は一時間釘をうつても疲れるこゝを知らない。

以上述べたこゝろは一般的の觀察であるが、これを意識の方面から見るに、習慣は、活動を支配する能動的注意を進化せしめて、所謂第二次的所動的注意の下に行はしめる。はじめは、一つゝの事に對して、特に意を用ひるの必要があるけれども、慣れるに従つて、意を用ふるこゝなしに行はるゝに至るのである。しかもかくの如き過程に於て、活動は漸次無注意的狀態の下に行はるゝに拘らず、自己の能力を信じて不安なきに至らしめるのであ

る。タイプ、ライティングの例をもつて、云へば、その當初にあつては、一度々々の印字に注意をはらうが、漸次この注意は行はれなくなり、はじめは誤りの不安にあるものを、自信の境にひき入れる様になる。

かくの如く習慣は、人間の活動を順應せしめる過程であるが、しかもこの習慣は、個體の許す範圍に於ては、如何なる方面の活動にも形成せられ得るのである。虚偽も、詐偽も、怠惰も、不正も、勤勉や、忠實や、なごゝ同様に、習慣化され得るものである。しかも、これ等の習慣は、本能的の傾向と共に、吾々の生活の大部分を支配してゐるものである。而して本能の轉向醇化も、これを行ふの時は、習慣の形成によるの外はない、朝起きる時間も、食事のなし方も、食事の時間も、勉學の時や時間も、喫煙するのも、茶をのむのも、數へ來れば、われゝの生活の大部は、習慣に支配されてゐるのであつて、しかも、これが後天的に人のしわざによつて、その方向を異にするこゝしたならば、教育のな

すべき仕事は、こゝに明かではないか。

二、習慣形成の難易と年齢。かくの如き習慣の形成も、何れの年齢に於ても、同様の難易の度を以つてなされること云ふことはできない。

まづ一般に兒童期に於て最もこの習慣を形成するものが容易である——即ち大なる可塑性がある——そして人間の習慣は、二十五歳から三十歳に於ては、殆んど完成されるものである。即ちその人の行動の傾向が一定して来る。勿論これ以後でも新しい習慣の形成がないのではないけれども。

これを換言するならば、人間の神経系統が、その反應の習慣を形成するには、その神経の尙幼時にするの要がある。しかも又、こゝは一樣にこの方面の働きも、同様の程度に習慣の形成が容易なのではない。殊に兒童期にあつてある方面がある他の方面よりも容易である様に見える。たゞへば指先の運動を迅速ならしめる習慣は、兒童の時期に、記憶も兒童の尙後年の時に、

輕業の様なものでも兒童期によるこゝが、その習慣形成のために最上であること云はれてゐる。かくの如きこゝは、他の種々の方面に於て見出されるであらう。幼少な時に、騒がしい處に育つたものは、いつまでたつても落ち付かない舉動があつたり、少年時代、青年時代を通じて勤勉でなかつたものは、凡そ一生を通じて、努力の精神があらはれないこと云ふ如きは、いかにこの可塑性の大なる時代の訓練が大切なるかを思はしめるものがある。

既に幼少時代の可塑性の大なる時が、この習慣の形成に大なる關係をもつてゐる。かくの如きは、両親の知る事知らざる事に拘はらず、教師が知る事知らざる事に拘はらず、兒童の精神系統の性質が、こゝに至らしめるのである。即ち日常起るすべてのこゝがかくなるべき性質をもつてゐるのである。兒童の環境がその性格の形成に與るのは、この所以である。殊に感情方面の習慣には、興つて力が多い。即ちこれによつて、快活にも陰鬱にも、氣早

にも慎重にもなるのである。古い諺に「兒童を六歳に至るまで走らしむれば、もはや捕へることはできない」と云つてゐるのはこの可塑性が兒童期に於て最も大なることを云つてゐるものである。

筋肉的の作業の習慣、即感覺と運動との結合の習慣は以上述べた方面よりは、一層後年に於ても尙形成されやすい。普通九歳位までは、特に身體習慣形成の容易なる時期と云はれてゐる。定時に眠り、定時に食ふと云ふが如き所謂衛生習慣、清潔の習慣、姿勢、歩行等の習慣などは、この時代に作られることが多い。兒童は、この時代には、この種の習慣を形成せざるを得ないのであるからこの時代を等閑に付する、一生を繰り返しのつかないことになる。

一方習慣の形成には、その行爲の難易によりて異なる。幼年の時、困難な習慣を形成しようとするのは効なきことと云はなくてはならない。年齢によつて活動の難易を考慮することは、以上述べた事と共に大切なことである。

ある。

三、習慣形成の條件。

かくの如く習慣は一定の時期に形成されやすいものであるが、この習慣が形成されるには種々の消極的、並に積極的の條件がある。この條件の如何によつて、習慣はその形成される程度を異にする。

一般に云へば、習慣の完成度と確實の度とは、注意の緊張、行爲に伴ふ快感、反復の度数によつて定まり、例外例はこれを破る條件と認められてゐる。

習慣を形成するに反復の必要なことは云ふまでもない。われ／＼は、できるだけ反復するの要がある。勿論いつの反復も、常に活動の器械化に同様な効果をもたらすとは云へない。即はじめは、非常な勢で進歩するが、漸次その進歩は少なくなり、また練習には、平原の状態があつて、少しも進むことのないように思はれる時期もあるからである。しかしそれにも拘らず、いつの反復も、習慣の形成には大切である。而して充分の器械化が行はれ

なくては、これが監督を怠るべからざる理由はこゝにある。

更にこの反復は、注意の緊張した時に行はれるこゝき、習慣形成の効果は、一層著しくなる。かゝるためには、この活動が興味あるものゝなつてゐるこゝきが大切である。即興味ある活動は愉快にその行動を果すこゝができる。このために、習慣の形成は、また著しく進歩するのである。かの兒童の好んでなす遊戯が著しい進歩をさける如きは、明かにこの條件に合してゐるのである。余が先に、教室の學習を遊戯化せよ、然らば著しい進歩を見るであらうと云へるは、この事實を指してゐるのである。かゝるためには、活動の感情的方面について考慮するの要がある。而して、この活動の感情價の最も大なるは、本能的活動であるこゝき、バイル教授は云つてゐる。遊戯に於ける感情價の大なるこゝきは、この點から了解し得るこゝきである。

こゝに反復と興味との關係を考へるに、常に同じ形に於て反復されるこ

ゝきは單調なつて、興味を失ひやすい。こゝに於て、同じ反復は、單時間行ひ、時に形を變へて行ふこゝきが大切なつて來るのである。

最後に習慣の除外例について一言する。習慣の形成に除外例を許すこゝきは、その習慣の幾日かの反復は、何等役だゝぬものゝなつてしまふ。今もし母親が嬰兒を床につけて添乳するこゝきなしに眠らせようと思すれば、活動は、習慣形成の積極的條件に合する様練習すれば、自ら習慣となる。併しなから、たゞ一度だけでも愛着にひかされてこれを抱きあけて添乳しつゝ眠らせるならば、數十日の努力は空しく消える。かの節酒、節煙が、禁酒禁煙より困難な理は、實にこゝにあるのである。

かるが故に、われわれは、兒童の習慣を形成せしめる時に、除外例を設けてはならない。今日は、疲れたから、今日は客があるから、と云ふ様な、事もなく故障をつくつて除外例を羅列するこゝきを許す教育は、反つて怠惰に對する

何等の除外例をも設けぬこゝとなり、この習慣を著しく形成するに至るのである。

これ等習慣形成の法則は、これを換言すれば、端緒を得よ、練習せよ、除外例を許すなご云ふことになる。習慣を形成する、端緒を得ること、最も困難である。即ちこの端緒をして、兒童の發意によらしむること、その興味を惹起せしめる所以で、従つて注意を緊張せしめて練習することの原因をなすものである。これがためには、兒童の本能的行動に着眼するの要がある。ある製作について他より負けんことを恐れて勤勉なる習慣を得るの端をひらくこともあり、教場にある他の生徒の迷惑に同情することによつて遅刻せぬ習慣の端をひらくこと云ふ如きこれである。何事にもそのはじめが大切であること云ふ謂は、習慣形成の端に精進の意氣を示すことの大切なことを意味する。

かくして習慣の生活に於ける價值、習慣形成について教育の重要な任務更に如何にして習慣を形成すべきかについての概観をなした。われわれは更に、一つ一つの具體的事實について、一層明瞭なる練習案をたて、兒童の習慣形成に努力しなくてはならない。

習慣形成、習慣の教育等については Pyl. Introduction into Science of Education (福富一郎氏譯、教育心理學概論) 中習慣の章に、詳細なる説述がある。本章も概要、これによつたものである。

第五章 道德性の發達

一、道德的陶冶の根柢。物質的文明進歩の一面に何人も認めざるを得ないのは、精神的方面就中人の道德性の退歩停滯云ふことである。近時諸種の精神運動が勃興するようになり、道德教育を振興すべし云ふ考が著しくなつて來たのは、こゝに眼をひらいて來たためである。

併しながら、これ等德育振興の根柢を倫理學や、宗教學に求むるこそが何等實際上の貢獻をもたらすことなきは、既に多くの見るまゝところによつて明かなること云はなくてはならない。これを兒童の教育に見ても、バイル教授が「德育の問題は、宗教學でなく、倫理學や社會學の交渉し得る局面はこの問題の究竟、即訓育の目的に過ぎない、しかるに、その目的、その理想に關しては、吾人はすべてが今日既に大體に一致をなし得てゐる。父母は自己の

子弟が如何なる人になるかについて、何等疑問もはさんではゐない。云つてゐることは、確に一面の眞理を含んでゐるものであつて、今日德育の効果なきことをなげかれるのは、倫理學の研究淺薄であり、國民道德の研究の不足するためではないと考へられる。

勿論、われ／＼が今日道德上の論議を戦はし、道德の究竟が社會學的に或は倫理學的に、いかなるものであるべきかを追究することは、必要なことには相違ないが、德育を振興し、道德性を陶冶することは、單にこれ等の論議にのみよつて可能なるものではない。われ／＼は兒童が、いかにこの道德の萌芽をもち、而していかにこれが發達し、いかなる動機によつてその行爲が形作られ、いかなる方法によつてその行爲が迷なき堅固なる徳性として固着せしめ得るかについて、兒童の心性を知り、その發達の狀態を知らなくては、これが有効なる導きをなすことはできない。こゝにはじめて、吾々は

現代の道德的要求の根柢を求めるところが、できるのである。

こゝに余は、單に道德性云ふが如き、漠然たる題目をかゝけたのであるが、これは決して單一なる精神機能ではない。今これについて、種々の方面から考へて見るに、まづ吾々が、その第一として考へなくてはならないのは、知的方面である。何が正しく、何が悪であるか云ふ觀念、即道德意識云はれてゐる方面これである。從來兒童の道德的方面さへ云へば、この側面の事をのみ考慮して來たことが多い。併しこれ等は決して、徳性の全部ではなく、これはむしろ、甚だ力弱き一部であつて、たゞその知識に止り、唯一の方面ではない。われ／＼がこの研究に止つてゐれば、道德性の涵養云ふことの如きは、殆んぞ望むべからざるものであらう。

行爲の動機、感情を先驅すること、既に人々の知るところである。これを例へば「氣の毒だ」と云ふ同情の念が、他人を助けること云ふ行爲になつ

てあらはれるのである。かゝるが故に、われ／＼は、兒童の道德的情操の發達如何を探るの要がある。

更にかゝる行爲が、吾々の生活に織り込まれ、固定されて、動搖なく、誘惑に打ち勝つて行くこゝに於て、はじめて、道德教育の果實を結ぶこゝができるのである。これがためには、一つの刺戟に對して、直ちにこの行動があらはるゝの練習を必要とする。これ既に述べた習慣形成の過程である。

これ等の習慣の固定に際し、ある行爲が禁止され、ある行爲が促進されるこゝ云ふ状態になるに際して、吾々は、こゝに重要な他の要素の入り込むこゝを考へなくてはならない。模倣や、暗示による意志禁止の働きは、この方面に於て重要な機能をもつものである。

徳性の涵養には、上述の如き、諸種の要素を必要とし、これ等の完全な協同によつてはじめて、道德的人格の完成を期するこゝができるのである。本

章に於ては、以下これ等諸種の要素について述べよう。

二、一般の道德的發達。 さてこれ等諸種の要素について述ぶるに先だつて、こゝにマクデューガルの説く人間道德性の發達についての四つの段階について考へておくこゝも無益のこゝではあるまい。氏は次の様に云つてゐる。

- 一、主として行爲の結果をしておこる快不快の感情によつて、本能的行爲を加減する時代。
- 二、多少共系統的に社會的環境によつて行はれる報酬と罰との影響を考慮して、本能的衝動の働きを加減する時代。
- 三、社會の毀譽褒貶を豫期して、行爲を加減する時代。
- 四、行爲の理想によつて、行爲が統制され、直接の社會的毀譽褒貶を度外視し、自己の正しき信ずる行爲をする時代。

「第一の時代は、最も幼稚な時代である。苦痛が兒童の衝動を禁止するものであつて、これ兒童の自己統制の内的の基礎である。であるからこの時代には、苦痛の起つたことに對してなす躊躇が最も大切になるのである。この點から考へれば、幼い兒童の道德的訓練は、罰をおそれることに、その項目になる」云、マクデューガルは云つてゐる。この苦痛が社會の報復に對する考慮となり、更に精神的の毀譽をおそれるに至つて一段の進歩をなすのであつて、而かも道德の理想はこの以外に立つて自己の信するところを行ふにありとするのである。これ等の段階はむしろ思惟の結果で事實上の發達は、これを直ちに適用することはできない。併しながら、これ等の内容はわれわれの參考となる點が多い。

まづ兒童が、その行爲の當然の結果たる、苦痛、快樂、損失、報酬等のあらゆる活動の結果を完全に自分に負ふ云ふことは、これ等の立場から見ても甚だ

大切である。これ等の生活經驗は、兒童の道德の根柢ともなるべきものである云はなくてはならない。このためにも兒童がその行爲による當然の結果を負ふために、環境の整理をなすことは、最も大切である。

次にこの内容は、兒童の行爲に對して、賞讃や罰が、その道德觀念の發達の助けとなることを語つてゐる。一般に賞罰云へば罰のみ考ふることが多いのであるが、賞罰は、字義通り賞したり罰したりである。賞するところが道德的結果を誘導することは事實であり、罰するところが、兒童の自制を誘ふことはこれ亦事實である。過賞過罰の弊の如き今更云ふまでもないことであらう。

三、道德意識の發達。 道德性の知的方面を通例道德意識と名づける、併しながら、これは道德の精神的側面ではなく、むしろ道德の知識的側面である。道德知識、又は道德觀念と云ふを適當とする。

道德行爲の前提として、道德標準の必要なことは、云ふまでもない。後にも述ぶるが如く、不良少年の二十五パーセント、乃至三十パーセントが低能であること云ふが如きは、この道德的標準が確定してゐない、否むしろ、道德觀念が缺除してゐるためこと云はなくてはならない。

從來の道德教授の殆んど全部の仕事はこの道德的標準、道德的觀念を授くることにあつた。元來兒童は幼少の頃は、その道德觀念は漠然なもので「よいこと」云ふが如くであつて、具體的でない。これが長ずるに従つて、正直、勇氣云ふ如き特殊なる道德的觀念となるのである。道德的觀念の教育もまた漠然たるものを具體的のものとする點にあること云はねばならぬ。久保良英氏の「徳目」に對する教師並に兒童の評價を題する研究についてその大體の傾向を察するに、兒童の學校内に於ける道德を教師の選擇によつて、勤勉、正直、規律、親切、整頓、禮儀、清潔、共同、友愛、として兒童の大切と思ふ順序

にこれを評價せしめる場合、正直は殆んど常に第一位であつて、整頓はすべてに於て最低位に來る。而して、共同、友愛、こと云ふが如き諸徳は、級の進むに従つて、その位置を高めて來るのである。而して兒童のかく判斷する根據は何れも兒童の修身教授の教授事項より得たる知識であることは、修身教科書にその原因を求めることのできるによつて明かである。これによつて云へば、現今の修身教授は、多少ともその機能を果してゐること云ふべきであつて、一方、また道德教育に於ける、道德知識の成立には周囲の教ふるところが大切であることが明かとなる。

ことにこの知識教授について少しく考ふべきは、兒童の諸種の生活に準據してその知識を授くるの要あることである。殊に兒童の本能的傾向の發達には、充分注意するの必要がある。未だ幼くして、個體本能のみが働く様なときにあたつて、國家道德を説くことは効のないことであることが明

かな如く、時にあたつて、兒童の了解し得る教材を考慮し、兒童の本能的發達を察して、その知識を授くるの要がある。

四、道德的情操の發達。 先に本能の章に述べた様に、人には、生れつき本能の一面たる情緒がある。不正なものを見て怒り、あはれなものを見て同情するこ云ふ如きは、すでに、道德的傾向の著しいものこ云はなくてはならぬ。こゝにわれわれは、この生れながらの情緒的傾向を知的發達に従つて醇化して、所謂道德的情操とするこは、道德教育に於て尤も必要とするこころであつて、現今の道德教育は、この一面に於て大なる缺陷を有してゐるものこ云はなくてはならない。既にこの美しい芽をもつてゐるのであるが故に、これを育むここの可能なるこは推するにあまりある。

こゝに同情の如き本能的傾向が、如何なる發達をなすかについて、知るこは、まづ最初に必要である。

ベーク (Book) は、兒童の同情する對象について研究して次の如き結果を得た

(總數 六三〇)

一、人	三五八
實際の人 二八五(母七四、父二三、妹八六、其の他一〇八)	
話や畫中の人、七三	
二、動物	二〇七
實在の動物	一七九
話や繪	二八
三、無生物人形植物	六五

これによつて見るに、最も多數の同情の對象は、その周圍に對するもので時に話中の人や動物に對して同情を示すものがある。而して、これを發達的に見れば、同情の第一歩は、その常に接してゐる周圍の人に對するもので

あつて、三歳以後に於て、この範圍は漸次擴張してゆく傾向がある云ふ。すでに、道德的情操の萌芽は幼くして人のそのふるまひのころである。こゝに於てこれを組織して眞の情操としてよく、鋭く、しかも敏く動くものとしなくてはならない。兒童の同情が、その最も利害關係深きものをはじめに、またその最も親しき周圍をまづ愛するまゝ云ふこゝに何の妨げがあらう。その最も近い人々をまづ愛するこゝが、愛の第一歩であり、それが愛の具體化であるこゝは、多くの人々のすでに説くまゝである。その憐人を愛し得ざるものが、遠く見も知らぬ異國の人を眞に愛するこゝが、できやうか。道德的教育の一面は確にこの萌芽を清く鋭く、感じ易いものに組織するこゝにある。

この手段として、余は、美しく清き傳記、又は、童話の如きものを選びたい。由來童話、傳記の如きは、兒童の心性に合し、その想像に感情的効果が多いも

のであるが、今かゝる方途にこれを用ふれば、これによつて兒童の感情は漸やく融合して活躍し、しかもその中に組織を得て、道德的情操の發達に結果するまゝが多い。たゞ讀物の選擇に關して、その内容が統一あるべきこゝを、そして、それが兒童の知的發達並に感情的傾向と一致してゐるこゝは、あらゆるこゝに先だつて、父兄や教師が考へなくてはならないこゝである。

五、模倣、意志禁止。 道德的の行爲を固定せしめるに、最も、與つて力あるものは、模倣であるこゝは、既に模倣の項について述べた。

われ／＼がもし、兒童に美しき行爲を固定せしめんとするまゝは、これに先だつものがまづ、その行爲をなさなくてはならない。兒童の師父たる人は、まづその子弟の道德的教育をなさんとするに先だつて、己れの情を美しく鋭敏にし、而して後子供に教へなくてはならない。而して、自らの行爲を道德的に律するまゝは、子供の行ひは、自ら道德的なるのである。

成人がもし、人のものを拾つたときにこれを黙つてかくしておく様なことをすれば、兒童もまた親の所有物を拾つたときに、黙つてこれをかくしておくやうになる。父兄や教師が、あやまつて他人に足をふまれたときに、「ん畜生」云ふ様なことがあれば、子供もこれを繰返すことは、勿論のこと云はなくてはならない。よき家庭(眞の意味に於ての)に育つた子供は、自らその舉動にそれがあらはれる、粗野な父兄の下に育てられた兒童は、その何れかに粗野の跡をたつことができない。これ等は模倣云ふ本能的傾向のある以上當然のこと云はなくてはならない。

模倣についてこゝに少しく理想的人物なる事實について述べておきたい。理想的人物云ふことは、吾々の生活に規範を與へ又は龜鑑となること云ふことを意味するものであつて、模倣の本能的傾向にその因を發してゐるものである。一般に兒童の理想的人物が、何處に求められてゐるか云

ふことは、道德訓練の上に大切な問題である。

まづ幼少の頃に於ては、その直接の周囲の人物、——たゞへば親戚、父母教師云ふ様な、——をえらぶものである。然るに年齢を加ふるに共に、こは、その選擇の範圍を廣げて、歴史的人物、社會的人物等を選ぶ様になる。

これ等の事實は、幼少の頃の道德的訓練がいかに、またその周圍に負ふことの大なるかを知らしめるものである。

道德的訓練の全體について、關係の深いのは、暗示による意志禁止云はるゝ現象である。モイマンはこの點について著しい一つの例をあげてゐる。一人の十三歳になる兒童が、新たに學校に入るにあつて、以前の受持教師が、この兒童について反感をもつてゐたために、烈しくこの兒童の悪口を捏造して新教師に報告した。その時以後、非常に行爲の優れてゐたこの兒童が、急に不良的傾向を帯び、しかもその注意が散漫となり、漸次知的の努

力を失つて、情緒的にも惡變化をなし一學年の終りに遂に落第するまでに至つたので、その兒童を信じてゐた親は、これを他の學校に轉じさせた。こゝにこの子供は、知遇を得た教師に逢つて、その時からまた回復し、遂に最もよき生徒として、學校を卒業するに至つた。云ふのである。この例は、最もよく意志禁止の現象を示してゐるものである。即意志禁止の作用が、この子供の全生活に廣がつて、自信を破壊し、情緒的生活を壓迫し、そしてすべての知的並に道德的努力を消滅せしめたのである。もしかくの如き兒童がその境遇を變へずして、救はれず——多くの場合には放任される——また同情ある教師に出會するこゝがなく、また自ら回復するこゝができなかつたならば、その一生涯が破壊されたものと思ふるの外はない。

意志禁止の現象には、二種を區別するこゝができる。一は、特殊の範圍に起るもので、一は、單なる偶然な出來事から一生残るやうなものである。前の

様な場合はよくわれ／＼が、心理學の實驗場なきで經驗するこゝろであつて、記憶の試験をなすにあつて、三語四語、五語を課してゆくにあつて、八語九語を記憶せしめられるときなきは、はじめに「これは大變」云ふ感によつて、この禁止が起り、結局、五語、六語の場合より少なく記憶するこゝ云ふ様なこゝになりやすいのである。

禍を一生に残すやうな意志禁止は、その根柢に於ては同様であるが異なる形ではある。一般にこの現象は兒童がある一事に努力する場合に起るのである。即教師、父兄、或はその友人なきが誤つた取り扱ひをする、たゞせば、ひやかしたり、その努力をけなしたりする、急にその努力をやめ、以後、かゝる場合兒童は、自信を失ひ、仕事に努力できなくなるのである。

時としてこの意志禁止は、偶然なる失敗にその原因をもつこゝがある。ふさしたこゝから間違つたこゝをなしこれによつて、其後の行爲を支配す

る。物を壊す云ふ様なときは、よほぎ、両親や、長上が氣をつけべきである。

尙この意志禁止は、教師や両親の暗示によつてしばしば繰り返されてゐるこゝがある。たゞへば、兒童に「あなたはわるい人」云ふ様なこゝを常に繰り返すときは、遂には本當にわるい人になる。即その暗示の作用によつて、意志禁止を起し、遂に情緒的に墜落するに至るこゝはめづらしくないのである。モイマンのあげた例の如きは、其一例である。

併しながら、この意志禁止は、すべての兒童に同様に作用するのではない兒童によつては、一時これが影響を蒙つてもこれを回復するものもある。自信の弱い兒童、學校の成績のわるい兒童、なごは、この暗示を受けやすく、また野心の深い兒童、身體的發達がおくれ、又は痺弱な兒童においては、この作用の行はれるこゝが多いのであつて、特に注意しなくてはならない。

前述の如くこの意志禁止と最も關係をもつてゐるものは、兒童の暗示性である。暗示の感受性は、年齢と共に減するものであつて、十五歳に至れば九歳の半分もない云はれてゐる。暗示に對する、抵抗性は女子に於ては少ない。又、知能の發達の低い兒童に於ては、この抵抗性が少ない。

前述の意志禁止なごも、或は、自己の失敗の暗示を受けたり、或は、他人のこれに示す暗示をうけたりして起るのであつて、兒童の道德性の向上に於てはこの暗示性について深い考慮をほらひ、この暗示の抵抗性を高めなくてはならない。これがためには、兒童の自信を増さしめるこゝに最も留意しなくてはならないのである。

六、習慣の形成。 道德の實行の確實云ふこゝは、既に述べた通り、一定の刺戟に對して、一定の行爲を確實に、反應する云ふこゝに外ならない。パレットの言を假りて云へば、徳は、明かに價值高き行爲に對して躊躇な

く選擇する習慣である。この點について、道德的習慣の確立に云ふことは非常に大切なことと云はなくてはならない。道德訓練の最後の目標はここにありるのである。

吾々は習慣形成の法則をこゝに適用し、その可塑性の著しき時代に適當な機會をこらへて、更にこれを反復せしめ、除外例を許さないときに、確實な道德習慣を形成し得るのである。

かくの如くして道德的訓練は達せらるべきものであるが、この場合にあつて、訓練について、父兄はあまりに學校に大きな負擔を加ふべきでない。今の社會では、一般に學校教育の効果を過大視するの弊がある。そして主として家庭の仕事であるべき道德的訓練をさへ、學校に委ね去つて省みない様な趣がある。勿論學校もその機能を果すことに於て重大ではあるが、家庭の責務を忘れてはならぬ。實に道德的訓練の中には就學前に達せら

れる訓練が多く、また入學後、雖も兒童の生活する、大部分は家庭の環境の中であるからである。

かくして作られた習慣的反應の集團がわれわれの性格をつくるものである。この習慣の束の高下が即吾人の性格の高下を示すものである。

以上余は道德的行爲の標準となるべき道德意識の特質を述べ更に動機の構成にあづかるべき感情の兒童に於ける性質を述べ、加ふるに、これが行爲となるについて重大なる模倣意志禁止に云ふ様な事實について述べ最後に、これ等により習慣的行爲の形成が、道德性の涵養について最後のものであることを述べたのである。われわれがこれ等について、もつ知識は、甚だ貧しいものである。併し、上のこれ等の心理學的敘述は多少なりとも兒童の道德的教養に教ふるどころがあるに信するものである。

道德訓練と習慣との關係は、パイン氏 *Introduction into Science of Ethica* (福富一郎氏譯、教育心理學概論) 中に詳論してある。習慣の道德に於ける價值を過大視したるやの感あるも、徹底的に論ぜられ、かつ吾々の衷心賛意を表すべき論義を含んでゐる。

七、道德上の異常見。兒童の中には、道德的發達の病的なものがある。所謂不良少年云ふもの即、これである。不良少年は、一般には、犯罪を犯した兒童を指すのであるが、兒童の中、徳性の發達が不完全で、著しい盜癖や、詐欺癖、人いぢめ、云ふ様な傾向のあるものは、こゝに含めらるべきものである。

道德的の缺陷兒童の原因は多様であるが、まづ第一にあけなくてはならないのは、知能の發達の低い云ふことである。歐米各國の調査は、區々ではあるが、不良少年の、二十五パーセント乃至四〇パーセントは低能である。

こゝには、その多くが低能であり従つて道德意識の缺乏云ふことがその原因として考へられるかを見るこゝができる。

精神的尋常	三六人(二九、五%)
精神薄弱(低能)	七二(五九、〇%)
變質	一四(一一、五%)
計	一二二

(大正十一年三月調)

次にその多くが低能であり従つて道德意識の缺乏云ふことがその原因として考へられるかを見るこゝができる。次は、境遇である。兒童は、その幼少の頃は、不良的傾向のほの見ゆるを常とする。これが、その環境非にして監督を充分にするこゝができない云ふが如き時に於ては、異常な發達を遂げて來るのである。兩親がなかつた

り繼母であつたり、繼父であつたりしてその境遇のあしきこゝが、その原因
となるこゝは、左記の表によつてまた知るこゝができる。

	實數	%
實父母	三八	三一
父又は母のみのもの	三六	二九
兩親なきもの	三〇	二五 六九
繼母又は、繼父のもの	一八	一五

(武藏野學院收容兒童)

又、身體の缺陷によるものがあるこゝ云ふこゝも云はれてゐる。視力の缺
陷、榮養の缺陷、微毒等はこれである。

これ等は、兒童の内に潜むものであるが、外圍的原因としてあげべきも
のは、少年勞働、閑散、少年團體、娛樂場等であつて、工場の組織が不完全であつ

て、成人のわるい影響をうけ、何もするこゝがなく、閑でゐるわるいこゝを
考へ、不良少年が團體を作つて横行する仲間となつたり、活動寫眞場でわる
いこゝを覺えるこゝ云ふやうなこゝは、單にこれだけでは起らないのである
が、これが前述の內的の傾向と結合するに至つて、不良少年を作るに至るの
である。

これ等の原因となるこゝについて、特殊の注意をなすべきこゝは、勿論で
あつて、すでに述べ來つた、環境の整理、個人差の鑑別等は、これ等の防止にあ
づかつて力あるものであつて、これ等が閑却され、又は境遇によつて全く教
養が省みられないこゝにかくの如き兒童を出すに至るのである。

第六章 美的感情の發達

一、美的感情の研究。 精神的陶冶に與るべき他の一は美的教養である。實にフォルケルトも云ふ如く美的教育は個人に於てはその個人全體の教養を高める所以であつて、精神的向上に於て缺くべからざるもの云はなくてはならぬ。近時藝術教育の高唱せられて來たこゝは因をこゝに發してゐるものであらう。

併し乍ら、この美的教育がいかにして合理的に行はるゝか云ふことを考ふるにあつて吾々はその教育の對象たる兒童の美的感情の發達如何に思ひ至らざるを得ないのである。吾々は兒童の精神生活に没交渉の資料によつて兒童の美的教育を完ふせんとするの無謀が何等なすこゝなきは已に熟知するところである。

茲に吾々は兒童の美的感情の發達を明かにし、これによつてその發達に相當せる教養の標準を立て、こゝにはじめて兒童教養の効をあげるを得るのであつて、美的教養の根柢も亦兒童の美的感情發達の如何を究むるにあるこゝはなくてはならぬ。

併し乍ら兒童の美的感情の發達の如きは兒童心理學上未だ充分な研究を遂げたりこゝ云ふこゝのできない範圍に屬する。今はたゞ從來の研究され來つたところを述べてこれによつて多少の教育上の示唆を得るに止るこゝはまたやむを得ないこゝと云はなければならぬ。

二、眼の美感の發達。 眼の美感こゝに云ふものは兒童の色、光、形、繪等に對する美的感情を指して云ふのである。

まづ幼少の兒童ではそれらしき美感を嬰兒の注意の方向やよろこびの表情等によつて察するこゝができる。家の爐に燃ゆる焔を見てよろこび

障子に向つて陽のかけのうつるのを見てよろこぶのは、嬰兒に於てすでにわれ／＼の觀察し得たこゝろである。兒童は、その最初に於てまづあかるさについてよろこびをあらはすのである。

この程度の兒童の注意は、本書七九頁に載する、好奇心等のはじめと全く區別することのできないものである。その表について、兒童が、光、色、音等に對して、いかに早く興味を覺ゆのを見られよ。

色彩について好惡をあらはす——即色彩美感情のはじめ——は三歳四歳以後にある。幼兒殊に女兒が赤い衣服をきて喜ぶこゝはすでに多くの人々の知るこゝろである。モイマンは七歳より十四歳までの兒童について色の好惡のいかに發達するかを研究した。これによれば最もすきな色は青次は赤で次は黄であつた。ウインチ(Winckel)の研究によれば兒童に於

ては矢張り同様に青が最も多く好まれ赤がこれに次いだ。併し上級に至つては赤は第三位となる傾向をあらはし、而も緑は年齢と共に好まるゝ程度が著しいと云ふ。日本に於て今堀氏の研究したるところによれば下級に於ては第一に青が好まれ次に檸檬黄、赤が位して居る。上級に於ては、これは青紫、檸檬緑の順となる。これ等何れを見ても兒童に於ては明瞭な色彩、これを繪具に云はゞ原色に近き色を好むこゝが覗はれるのである。

色の配合に於ても同様の嗜好をあらはすものである。即對比の關係の最も明瞭な補色關係にある配合を最も好む傾向があるのであつて、これはモイマンも實驗によつて證してゐるところである。

これ等色彩美感情は成人のそれに比して多くの相違をもつてゐる。即成人に於て好まるゝ色彩は前述の如く綠其他混合色が多く色彩の調和は兒童のそれと異なつて補色を避けたるこれに近き色又は近似の色に於て

求められるのである。

これを少しく複雑せる場合に見るに繪畫に對する美的態度は如何に發達するか。ピントナーはこれについて同じ内容を有してその表現の形式を異にする六枚の繪畫について六歳より十四歳までの兒童についてその美的評價の變化を研究した。この繪畫は第一は着色した印刷他は水彩畫で第二は最もよくできたうつしで、第三と第四は色彩に於て第二に劣り第五は淡紅色と黄色との華美な色彩のもので以上の四枚よりも明かに劣つてゐるものであつた。第六はそれ程でないものである。これ等の繪畫はそれ／＼藝術家によつて第一より順次第五までの美的價值を決定されたものであつたが兒童の評價は次の表に見るが如く幼少なる兒童程この標準と異つてゐる。即最も幼少な兒童では最も華美な色彩のあるものを第一とし、七歳より九歳までに於てはこれが第二位とされ、眞の評價の行は

るゝは十二歳以後である。(この評價は成人に於ても3, 4は誤まられてゐる。之によれば成人もまだ眞にこれを味ふことができないと云ひ得る)

年齢	一位	二位	三位	四位	五位	六位
成人	—	二	四	三	六	二
一四	—	二	四	三	六	二
一三	—	二	四	三	五	六
一二	—	二	四	三	五	六
一一	—	三	二	四	五	六
一〇	—	二	四	三	六	五
九	—	五	四	二	三	六
八	—	五	六	四	三	六
七	—	五	六	四	二	三
六	五	一	四	三	六	二

かくの如くして幼少九歳頃までは未だ色彩の繪畫にあらはれたものに對しても單に華美な點をよろこび眞の美的判斷をなすことはできないのである。

これ等によつても明かな如く兒童の美的態度は成人のそれとは甚だその趣を異にするものであることは了解することができなが、こゝにあけたものはたゞその一例とすべきであつて尙その最も重要な相違點について次に述べやう。

まづ兒童の美的態度は繪畫の眞の價値に向はない。彼等は繪畫を見ても寫實の興味に動くのである。風景畫を見て兒童の動かす興味のみづ第一は「何處か?」あそこであると云ふ再認のよろこびである。成人も雖も藝術的訓練なき人は「これはよくできてゐる。」「實物そのまゝである」と云ふが如き語を以つて繪畫を批評するのである。併し眞に藝術的教養ある人は

かくの如き態度からぬけだし、その作品が藝術家によつていかなる個性的色彩を帯びてゐるかを見るやうにならなくてはならぬ。結局繪畫は自然の寫しではなくして自然を自由に創造的に變形したものであつて、その精神を認むるこゝが、その作品の藝術的價値の如何を知らしめ、こゝに藝術的境界地を開展せしめるが故である。

また兒童の美的態度は部分的である。一部一部についてその繪畫を見やうとするの態度を出でぬ。これは敢て美的態度のみに限らず兒童の精神作用の特質を云ふべきものである。ある部分を見るときはその部分にのみ注意が限られ他の部分との關係に向はない。兒童の描く畫がその割合について考へられてゐないのはこれによるのである。成人のそれはこれは大に異つてゐる。少なくとも眞の藝術的態度に於て繪畫を見る人は多様の間統一を認め、全體としての調和渾一についての觀照を大切とする。

るのである。これも亦兒童の美的態度の異なるところである。

更に兒童は繪畫を見るにあつて概念的である。そこに描かれてある個體の所謂個體的生命を認めんとするの傾向に乏しい。猫を云へば足の四本にして尾のあるもの三毛か黒か斑かを云ふ様に見てその猫のそこにあらず個體的生命について見やうとしない。これは前述の再認の傾向に似て居るのであるが「猫が居た」と云ふことを見てその猫の特別な姿勢がいか生きてゐるかについて考へない。従つて少しく概念に背くことこれに氣がつくこと云ふ様になるのである。

凡そこれ等の兒童の美的態度は、これに教養を加へざるに加ふるによつては甚だしき差を生ずるものである。前述の如く成人に於ても兒童そのまゝの美的態度をもつ人もめづらしくないのである。こゝに於て吾々は兒童の美的教育を必要とするのである。而してこの教育は兒童の有す

る美的態度を出發點として一步一步向上せしめてゆかなければならぬこと勿論である。

この點についてデーニング(Dunning)の研究したところは示唆するところが多い。氏は兒童の繪畫を見る態度を訓練して藝術的な感受性にいかにか影響するかを研究した。その結果によれば、兒童は十歳以後でなくては、この影響を有効ならしむることはできない。而して十三歳に於ては繪畫についての全體的觀賞をなすを得るに至り十六歳に於ては教授者の示すところに従つて諸種の美的態度をあらはすことができた。かくして十歳以後に於ては藝術的價值なき繪畫を區別し十三歳以後には非常なる正確さを以つてこれが行はれた。而して、藝術教育の影響は十歳以後に受けたるものは、後年まで残るものである。十歳以下に於ては色彩は最も重きをなし主としてその内容によつて繪を見んことをする。以つて美的教育の指針

をなすに足りることを云つてゐる。

かくの如き立場から云ふとき、兒童の美的態度の教養は、已に十歳にはじまらなくてはならない。それ以前は色に對する教育をなすべきであることはねばならぬ。藝術觀照の教育について本邦の圖畫教育を見るに從來多くの缺陷をもつて居る。今こゝに見ても、この方面の教育は已に尋常五年にはじまらなくてはならないのである。これ等は以つて一般家庭並に教師の注意すべきことである。

こゝに一言すべきは繪畫の制作についての教育である。兒童の作畫の發達は分つて錯畫期(四歳—五歳)藝術的錯感期(六歳—八歳)自覺期(八歳—十歳)とする。而して錯畫期は兒童のいたづら書であつて、未だ兒童の運筆を描かんことを一致しないことである。(圖A)藝術的錯感期に入るに至れば、兒童の作畫は觀念的記號的特徴を發揮する。圖Bに見る如



きもの即これである。而してこの觀念的記號的繪畫は漸次寫實的傾向を帯びて發達するものである。圖Cに示す如くBは甚だ異つて著しく寫實的なる。而してこの寫實的なるは凡そ七歳半滿年齢以後である。即これ以前は觀念的である云ふことができる。こゝに於て兒童の作畫

はこの期に觀念的な作畫をなさしめて自由なる運筆を練習せしめ、かつその精神的活動を盛ならしむるの要があるのであつて、寫生畫はこの寫實的傾向の發生したまきに開始して、はじめて兒童の全幅の精神活動をなさしめ、従つて大なる進歩を遂げしめることができるのである。本邦に於ける圖畫教育は、これ等の研究によつて改良せられたところが多い。この場合臨畫帳を用ひるゝ實物の寫生との間に兒童の精神活動の相違をあらはすところは言ふの要もあるまい。

兒童の描畫の發達就中、錯感期の發達については、拙稿「兒童人物畫の發生的觀察に詳し」(兒童研究所紀要第六卷)本邦兒童の描畫については、宮崎清氏「兒童の繪畫」(心理研究第六卷)は詳しく諸種の觀察をしてゐる。

三、耳の美感の發達。 繪畫の教育については未だしも注意せられたる
 ところが多いが音樂の教育については、甚だしく閑却された趣がある。

音に對する興味が早く發達することは既に述べたところであるが、嬰兒
 が抱かれ負はれながらなつかしき子守歌の旋律に恍惚の境に入るこゝや、
 律動的な音を喜ぶこゝ云ふやうなこゝは、已にわれわれの日常經驗するこゝ
 ろであつて、兒童の音樂的素質を語るものこゝはなくてはならぬ。

リヒテンベルグ(Lichtenberger)は兒童の律動及旋律に關する好惡につ
 いて研究した。まづ六歳から八歳位の兒童にあつては、律動及旋律の感情
 的影響はあまりあらはれないが九歳に至つては、こゝは著しく現はれる。九
 歳に於て兒童は音樂に於けるこの二個の感情的の效果について著しく區
 別するを得るに至るのである。而してこの中律動の效果は旋律の效果に
 優るやうである。この事實は、また兒童に於て律動の記憶が旋律の記憶に

優るこゝによつても知るこゝができる。こゝ云つて居る。

音樂に於ける協音の美的感受性についてヴァレンティン(Valentin)の研究
 したこゝろによれば兒童は九歳以前に於ては、協和音と不協和音との明瞭
 な好惡をあらはすこゝはできない。然るに九歳に至れば著しく可能とな
 る。而して十二三歳になれば成人のなし得るこゝ同様に一オクターヴの中
 で十二種類の種々の間隔をもつ二音の倍調を區別するこゝができた。

而して音樂的嗜好についてランカスターの研究せるこゝろは最も音樂
 を好むは十五歳であつてこの後一二年は音樂に熱中する傾向があるこゝ
 を示してゐる。

これ等諸種の研究を綜合すれば、兒童は九歳に達すれば音樂の形式美に
 對する美的感情が發達して、その美しきものに心を喜ばしめるこゝができ、
 十五歳より一二年の間は、音樂的興味の最もよく發達するこゝを知るこゝ

ができる。本邦の兒童について研究するにきこれ等と同様の結果を來すや否やは明らかではないがおそらくは大差がないであらうと思ふ。これ等耳の美感は一方兒童自らの歌ふこゝも同時にその觀賞の生活を開展せしめる根柢を與へるものである。

こゝに唱歌について大切な聲域の發達について少しくつけ加へておかう。パウルゼン(Paulsen)がキールの學校生徒六歳より十五歳までの男女合計四千九百四十四人について、特殊の努力なくして發生するこゝのできる音の最高最低の音を研究せるにころによれば、その聲域は別表の如くであつて兒童期の最終に三オクターヴなる。而して變聲期は十三歳乃至十五歳であるに云ふ。故に兒童の歌ふ歌曲の選擇も年と共に變らなくてはならないのである。

而して、聲域の個人差は大であつて氏の研究に見れば十歳に於て一オク

(女兒)	最高	最低
六歳	d'	a'
七歳	c'	a'
八歳	d'	a'
九歳	e'	a'
十歳	f'	e
十歳以後	a ²	e

(男子は、十二歳にてg²三歳にて低音g²あらはる)

ターヴ以下のもの男に一二、五%女に五、六%、一オクターヴ乃至二オクターヴの者男に八三、七%女に八五%、二オクターヴ以上のもの男三、九%女八、八%あるに云ふ。(松本檜崎共著教育的心理學七四、七五頁による。)これによつて兒童の歌ふ歌の音聲の不一致が了解されるのである。

こゝに注意すべきは繪畫に於ても音樂に於ても特にその方面の材能の貧しい兒童の存在するこゝである。

シエスラー(Schlesler)は兒童の中に非音樂的兒童の存在するこゝを研究によつて明かにした。氏は千人の兒童中五十パーセントは音樂的兒童であるが、四十パーセントの半音樂的兒童、一〇パーセントの時には五パーセン

ト非音樂的兒童が存在するに云ひその能力の重要な差は、音程の記憶に云ふことに存するに云つてゐる。尙これ等非音樂的兒童も音樂的練習が不可能なわけではないから、特別な練習の案をたつてこれ等の兒童の音樂教授をなすべしに云つてゐる。

繪畫に於てもかくの如き種類の兒童がまた存する。これ等にも特別な教養を怠るべきではないと思ふ。

かくして余は一般美的教養の基礎にも云ふべき兒童の美感の發達についてその概略を述べた。われわれはこれ等の基礎の上に具體的な教育の案をたてなくてはならぬ。

而してこの際にあたつて最も必要なことは美的環境をつくるに云ふことである。常に美しき繪畫に接し美しき音樂に接するときは、幼少なる兒童は未だこれをその本來の價値に於て鑑賞することはないけれども、その

心的發達に應じてこれを味ふことができ、かつこれを導く手段もなるのである。この事は一方に於てその相當せる材料によつてこれを導くと同時に大切なことと云はなくてはならぬ。

第七章 各種精神機能の發達

以上に於て余は主として兒童教養の問題から見て必要と思はるゝ實際的事項を基として心理學的問題について叙述して來た。こゝに最後として各種の精神作用についてその一般の發達の概観について述べて見たいと思ふ。而してこゝに述ぶるところは主として兒童の精神作用の特質を見ゆるものについて述べ、かつ教育上の注意に止めたいのである。

一、注意。注意はわれわれの眼が外界を見るに似て、特に注意する對象が他より明かになる過程を云ふのである。注意はその對象が自ら注意せらるゝ場合、注意せんとして注意する場合と分つて考へられる。前者を受動的注意又は無意注意と云ひ、後者を能動的注意又は有意的注意と云ふ。而して後者は練習によつて第二次的無意注意となるのである。

兒童の注意はこの無意注意に屬する注意が多い。意志的努力をはらつて注意することは困難である。無意注意の惹起する條件としては種々なものが考へられる。刺戟の強度や廣がりの大なること、刺戟の新奇なること、反復されること、運動すること、なごこれであるが、兒童の注意はかゝる條件をそなへる刺戟に惹かれ、これの少ない刺戟には注意することが困難である。幼少な兒童は呼ぶ聲に應じて注意し、自ら注意することがない。

注意の働く範圍は成人に於て最も多くて六つとされてゐる。目に見るものも何等關係のないものは六つを越えては六つとされてゐる。目に見る音も一まごめとして感じ得るのは六つである。然るに兒童にあつてはこの注意の範圍が成人のそれに比して狭いのである。片手に玩具をもつ嬰兒に更にそのあいた手に玩具をもたしむれば前にもつ玩具をおさすこと、ふことはこの注意の範圍が狭いために兩方に注意することができないか

らである。かつて余が小學校兒童九歳より十七歳までの兒童青年について瞬間露出機によつて検査した結果を見るに次の如くである。

年齢	八	九	一〇	一一	一二	一三	一四	一五	一六	一七
男(平均)	一、八	二、二	二、七	二、六	二、九	三、〇	一	三、五	三、五	三、五
女(同)	二、〇	二、三	二、二	二、六	三、一	二、九	三、三	三、四	三、三	三、五

幼少の兒童は注意の及ぶ範圍の狭いことはこれによつても明かである。従つて兒童は複雑な對象に注意することが困難であり、いくつかの仕事を一時にするに云ふことができない。

兒童の注意の深さはまた成人に比して浅い。即何かの障害に逢ふに直に注意が散漫になるのである。これ等は注意の作業中に妨害となる様な

刺戟を加へて實驗して見る——たゞは加算をさせて一方でこれを妨害する様に音楽をするこふ様なこゝによつて見るこ兒童の方がはるかに妨害されやすい。これも兒童の注意の一つの特質である。

次に有意注意の持續の長さの如何について見ても、年齢が幼少なる程この有意注意を持續するこゝの時間が短くなるものである。これ幼年になる程注意によつて精神が疲勞するこゝの速かなるを示してゐるものである。

これ等注意に於ける特質について考ふるに、兒童をして注意せしむるには、まづ興味の多い、注意の條件にかなつた様な作業からしなくてはならない。そしてこの注意を有意注意に導きこの有意注意を第二次の無意注意に導くやうにすべきである。

兒童の作業は一つより一つでなくてはならない。兒童の注意の範圍は

狭いのであるから一時に多くの仕事を課するときは、到底これを満足に果すこゝができないばかりでなく、時として已に述べた意志禁止を生ずる事となつて反つて、成績をあけるこゝができない。

また兒童の注意は攪亂されやすいのであるから、注意を要する作業を課するにあつてはに充分この方面の注意をなし、靜かなる周圍を選ぶの必要がある。

而して更に兒童の注意してなす作業の時間は、幼少な程短くなくてはならない。(二〇頁参照) 幼稚園は十五分、中學校は四十五分の授業時間なるべしこふ如き言ひならはしはこの意味を明かにしてゐるものである。

併しながら、これ等の注意はその修練によつては、長く、有意注意を持續するこゝもでき、周圍に攪亂されなすむ様にもできるのである。これ即習慣の力である。こゝに於て家庭又は學校に於ける注意の練習が大切な

こゝになつて來るのである。

二、認識作用。吾々が外界の状態や變化を知るこゝのできるのは認識の作用によるものである。而してこの認識作用を司る末梢の器官が即感官で感官による認識が即感覺である。

劣等感官即觸覺、運動感覺、有機感覺及嗅覺に於ては、兒童と成人との間に差を認めるこゝは少ない。たゞこゝに注意すべきは嗅覺が青年期に至つて急激に發達するこゝ云ふこゝである。

聽覺の發達は己に美的感情のこゝろに述べたこゝろを以つてつきてゐる。

視覺の發達は視覺機關たる眼の網膜の細胞の發達と並行してゐる。嬰兒にては、まづ光覺發達し、色彩感覺これにつき、色の中青黄を感ずるこゝ早く赤緑は後れて發達する。幼稚園兒童或は就學期の兒童ではすでに色彩

感覺は發達してゐるものこゝ云ふこゝができる。色の名稱について、松本博士等の調査せるこゝろによれば、最初黑白の名稱を記憶し、次に赤、青、緑に進むこゝ云ふこゝである。

感覺の働きを統一して外界の状態を感知するのを知覺と云ふ。普通、知覺は、空間の知覺と、時間の知覺とに分たれて考へられる。

幼兒の空間表象は、極めて單純であつて、視覺や觸覺で廣がりを感じ、唇なごの運動を以つて空間の表象が生じて來る。

兒童の距離に對する知覺は、六歳に至れば大に發達するこゝ云はれてゐる。モイマンの研究によれば、二種の長さを等分する試験に於て、六歳では、四分の五耗の誤があり七歳では、これが殆んきなくなつて、多くこゝも10耗多數は120耗の相違があるだけである。複雑な目測の如きでも、十二三歳になれば殆んき成人と變りがない。